いらつめ

第二十二號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十二號目次　（明治廿二年四月十五日）

挿畫
- フォンホフェル作人馬
- ケツプス作無心の小供
- 流行の見本
- 色々の影畫……………うらを見よ

社説……………堆久節

家政
- 甘藷百珍○○いらつめ料理●梅酒●檬水●親子揚●肉を鑑定する別法……小豆を速にやはらかに煮る法……干鮎を速にやはらかに煮る法……魚肉を骨まで軟に煮る法●●筍を貯ふる法●○魚鳥類の滚様●○精進煮汁の法●●●看病法一斑●親の恩○烱むる竈を直す法●長生の法

小説……………鶺鴒　第二回　麹亭飯人

論説……婦人の従順

文藝美術
- 和文の變遷　新保磐次君
- 日本美術沿革史（漆器の部）　美妙齋主人
- 曙の春　美妙齋主人
- 月花見立　闘みな子
- 櫻狩●●●東台春夜●●●口畫の解
- 日本の俗曲に付て　むもし樓翻仙
- 柳櫻都錦繪（二幕目）　立花家かをる

流行
- 流行見本挿畫の解――（第一）テーブル掛ぬびさり摸様●（第二）掛針さし●（第三）瀧のぼり鯉の根掛○小柳の帶の色合……厚板の帶

雜纂
- むびろんの奇風●●結婚の心得
- 女子の教育（承前）　加藤弘之君

寄書
- いらつめ方への御忠告　孚水女史
- 孚水女史に謝す　如電居士

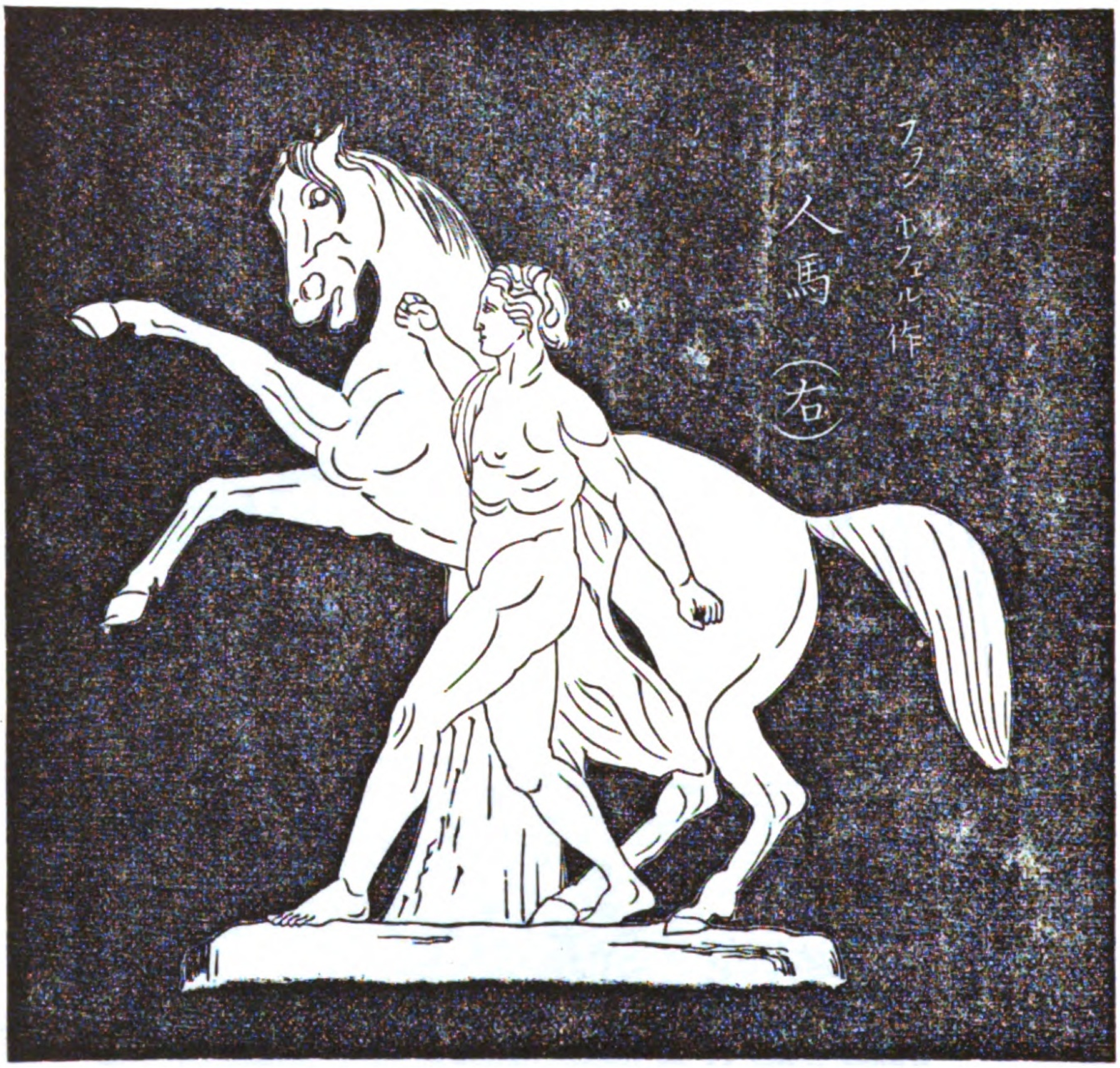
餘興
- 懸賞謎●●●●春雨遊　舞ッたく　鼻く

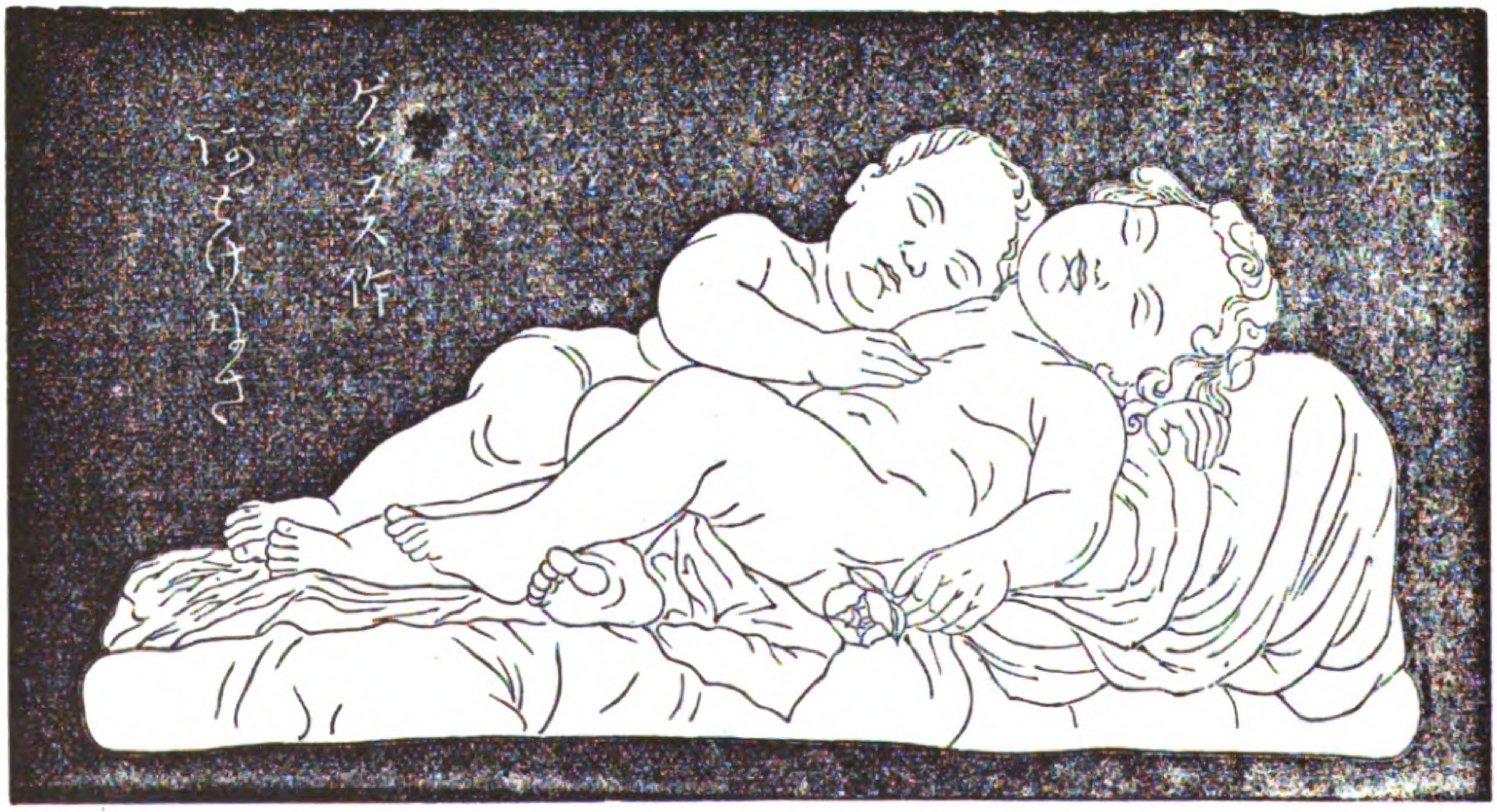
通信問答
- 毛を生す法●日に燒けぬ法●レモン入の石鹼●黒い肌を白くする法●鼻がつまるのを治する法●上等の鬢附さ梳油さ白粉さ白粉下●假名づかひ獨修書●日本辭字引●家政學の書物●育兒法の書物●西洋料理さ婦女衛生の書物●縮れ毛を直す法●散歩の仕方●齒痛を治す法●火藥の製法●渡金法●子供のよくできるさき●眞○の炭の製法●簿記學の書物●手輕染物法●鐵物のカナケを去る法●肉色を薄紅色にする法●肌をなめらかに白くする法●茶の利害○烟草の利害●血止法●齒磨の良否を知る法●汗を止める法●菓物を貯ふる法●衣類にインキの附きたるを落す法●和文を修める法●赤色を黒くする法

懸賞文藝
- 第二回の賞を得たる文さ歌
- 第三回の新題

月報

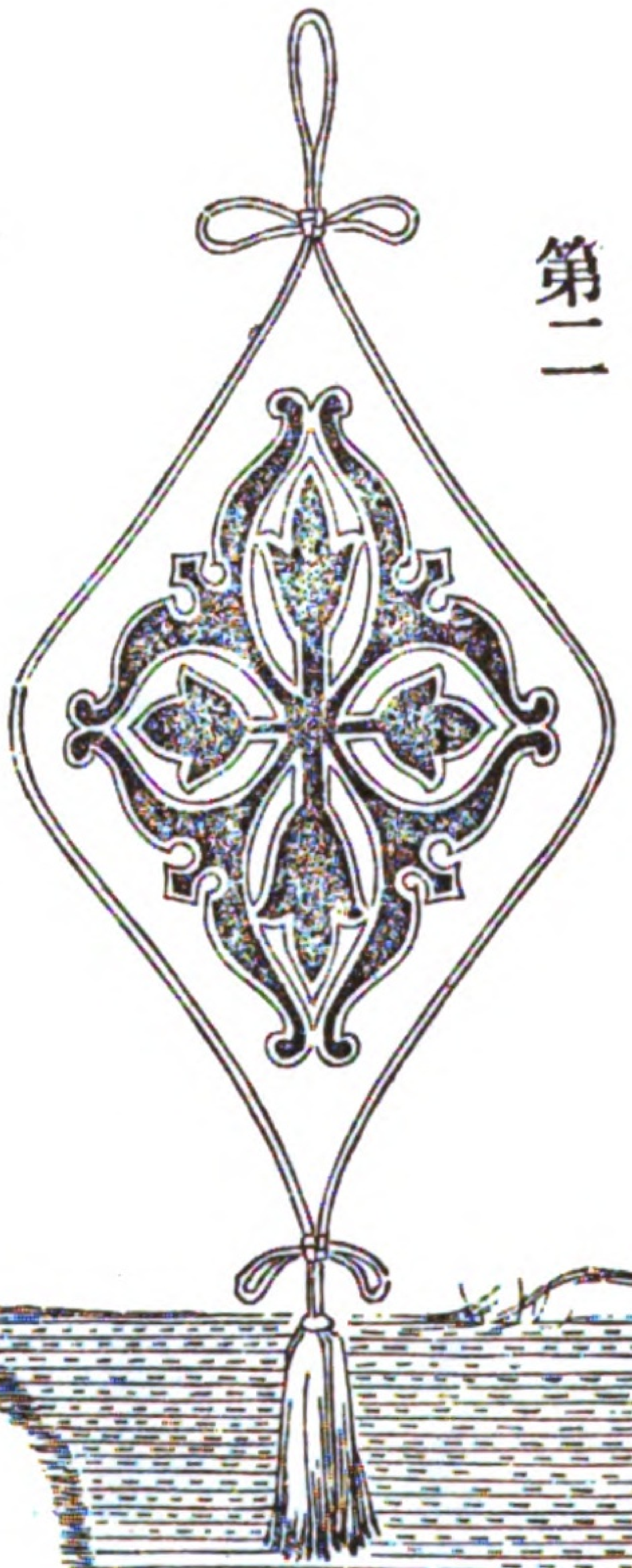
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY


フヲンホフェル作
人馬
（右）

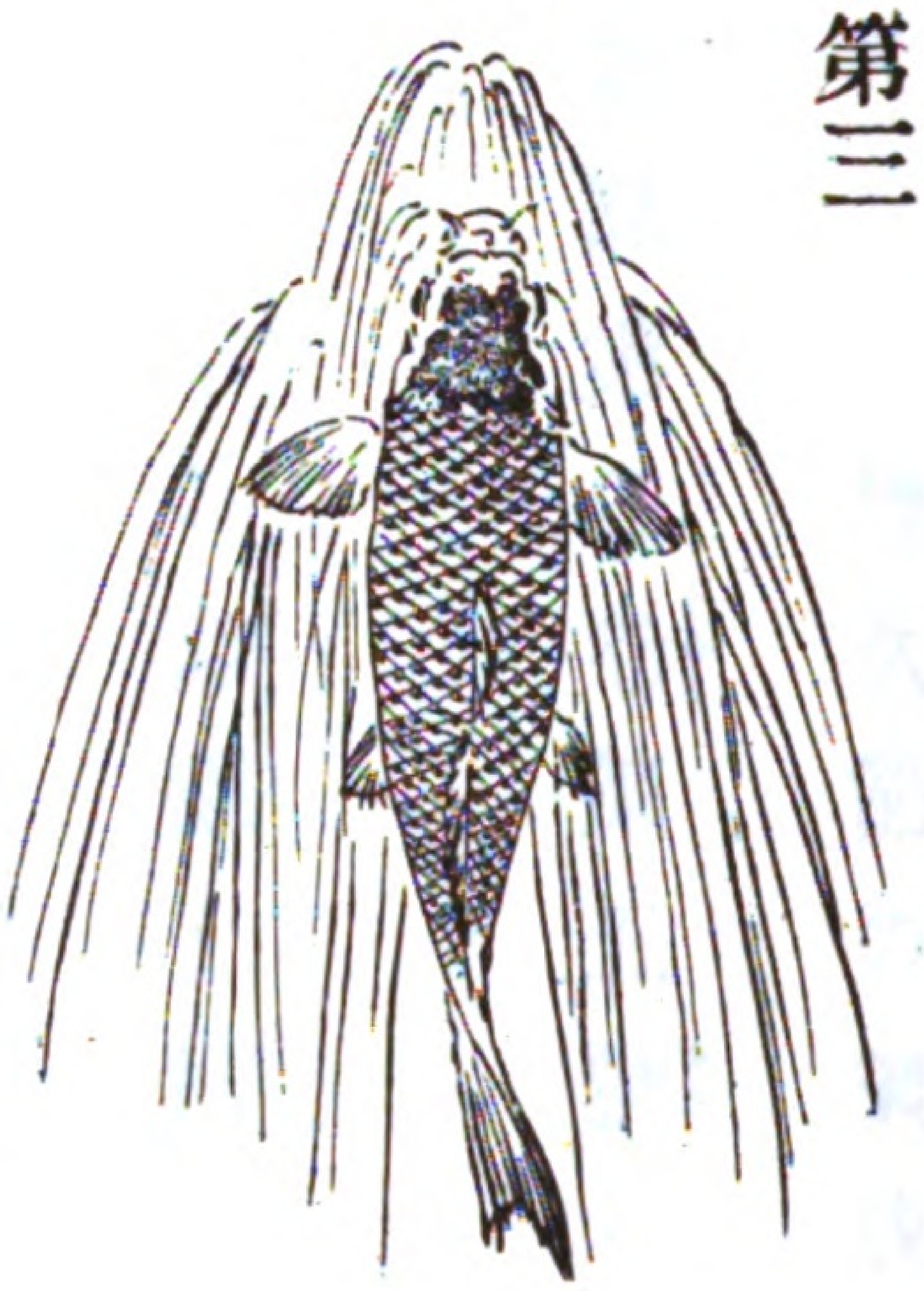

ゲッス作

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

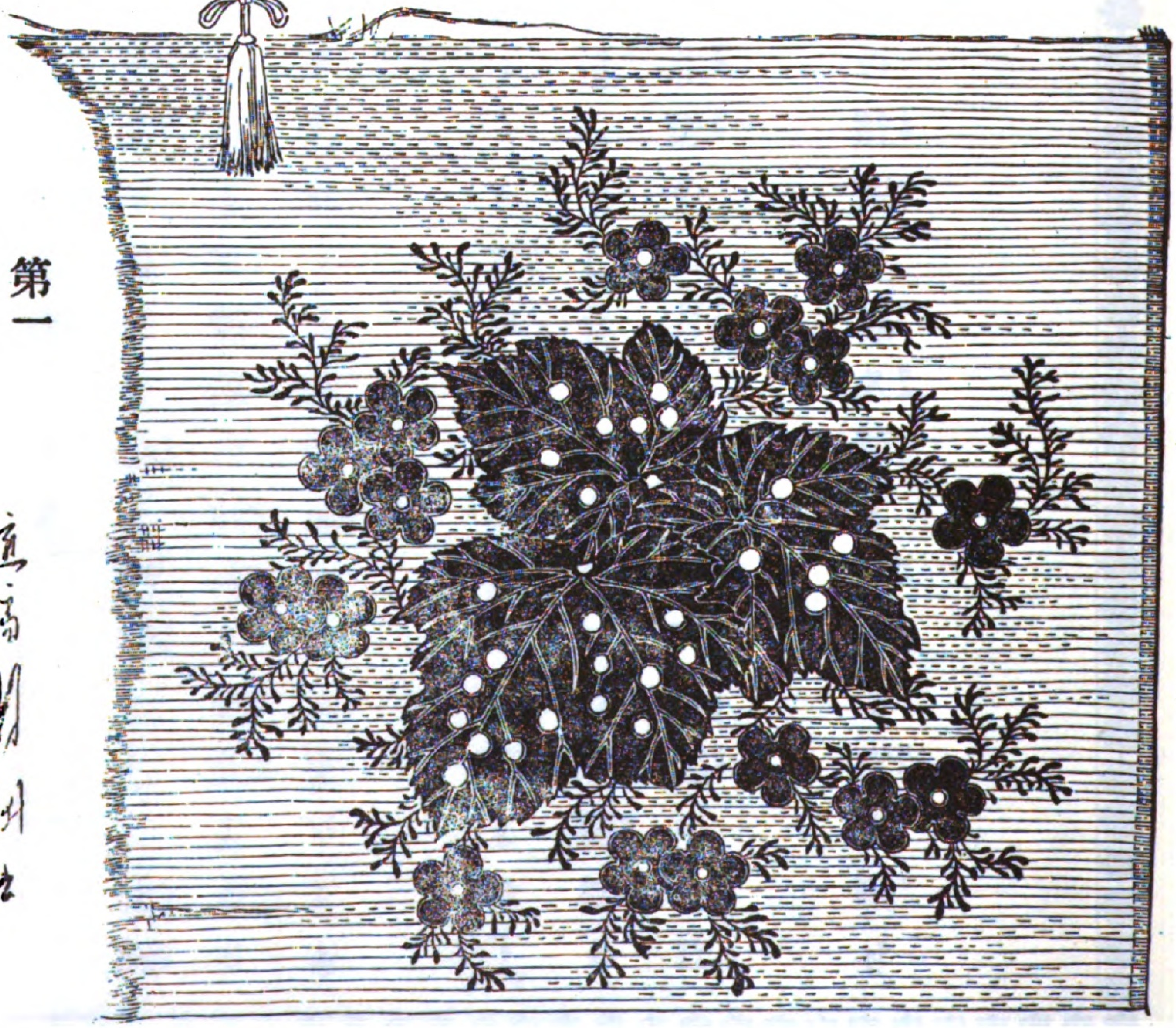
流行の欄内を見よ



第二



第三



第一

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

地久節の賛成

文雜誌第二卷第五號はその社說に「地久節」と題する文を載せ、今の皇后宮陛下の御德を稱へ、御生誕の五月廿八日を天長節のとほり國民一同祝はうとの心を述べました。これには女學雜誌も熱心に贊成しましたが、われ〳〵も實に心から全く贊成します。今の皇后宮陛下の御德に就いてはわれ〳〵が彼是と云ふまでもありません。因ッてはいらつめも文雜誌の計画を贊成すると同時、來月の發兌には特別の祝意を籠めた物を附錄として出版し、草莽からはるかに明月の光を拜む決心です。

いらつめ第二十二號

家政

甘藷百珍（前號つゞき）

（卅四）水引いも　生にて竪に片ぎて細く切中をくゝりて焙爐にかけるなり、手ぎハ第一あり。

（卅五）染花いも　（七十四）焼いもを馬尾篩ごしにして鬱金末少し入れ交合せ又漉して浸しもの杯のうへにはら〳〵と撒りていだす。

（卅六）黄雞卵様いも　むしいも馬尾篩漉しにして鬱金の粉にて染め雞卵の黄子の大きさにまるめ○諸の精を稀葛のみとく煮きて諸の精の粉を堅く捏ね上をまきて蒸し小口切にす。

（卅七）小倉野いも　焼いも馬尾篩おしにして大納言赤小豆を煮て入れ石蜜末にて仕立る中は（六十五）諸の精に石蜜末を合せ煮て製す。

（卅八）藕根射込いも　藕根長さ二寸ほどにきりよく湯煮し蒸いもの馬尾篩おしを（十七）色付にして穴の中へ入れ小口ぎりにす。

（卅九）いも餅　糯米蒸してよく搗き其中へ蒸いも皮を去り搗まぜちいさく取り砂糖、味噌、油煠、石蜜末撒等よろし。

（四十）鶉焼いも　生にて擦し粳粉少し入れ捏て赤小豆の餡をいれ饅頭のおとくに取り蒸熟て米の粉を糝し焙目二ッ斜に付る。

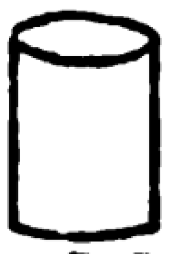
（四十一）午房射込いも　午房三寸ほどにきりて湯煮で中の心を取り稀豆油にて味をつけ○蒸いもの馬尾篩おしを午房の中へ入れ小口切色は見合付よし。

（四十二）氷柱いも　生にて細くきり葛粉にて糝し湯煮べし調味好み次第。

（四十三）和布巻いも　生にて適宜に切り相良和布にて巻き酒と豆油と等分にて煮るなり○和布を巻くとき葛粉か麺粉を和布に付て巻き糸にて括り煮る。

（四十四）松露いも　生にて骰に切ザット湯煮し食籮に入れて振廻し角をとり調味好みにしたがひ用ふべし煮すぎては砕けるなり。

（四十五）蕈いも　生にておろし蕈の笠の如く匾目にとり焼鍋に油を塗り炭火にかけ焼目をつけ○諸のじんを細くのばし紙に包み蒸して



是ほとに切り役につけるなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ料理

第七　梅酒

好き酒一升に氷砂糖百目梅干二十少さきは三十よく壜を洗ひおとして一所に壺に入れ口をよくふさぎ五十日ほど土中に深く埋み置べし梅の香よく味もよろし。

第八　櫻水

櫻の實の熟したのを取り、汁をしぼり、水五合に白砂糖二斤のまざッた汁を火にかけて煮立たせ、その處へ前の櫻の汁四五合をまぜ、よく掻き回し、冷ましてから飲むのです。はなはだ美味な飲物となります。あれは奇麗な瓶に密封して置けば久しくなるまで貯へられます。

第九　親子あげ

反鶏または鷄の肉を適宜に切り、玉子で解いた溫飩粉の衣をかけ、之を揚げたのが即ち親子あげです。

肉を鑑定する別法

一昨年のいらつめにも肉を鑑定する法を出しましたが、此法はまた簡畧な、正しい法です。藥屋に試驗紙といふものを賣ッて居ます。高い價のものでもありませんが、常に化

學に用ゐます。あの試驗紙の靑いのは酸氣に逢ふと赤く變はり、また赤いのはアルカリに逢ふと靑くなります。それ故にこれで肉の古いか新らしのが判斷されます。なぜなれば、肉がまだ新らしい間ハ酸氣が強く、古くて腐敗に近づけばアルカリ性になります。因ッて靑色の試驗紙を一寸肉に觸れさせ、試驗紙が赤くかはれば肉は新らしいのです、之に反して赤色の試驗紙を用ゐてその色が靑くかはれば肉は古いのです。

全体肉の新らしいか古いかを見分るには肉の色合により、またその彈力に因ッてします。しかし、あの色合及び彈力に因る鑑定は中々うまく行へません……行ふ熟練の實の處一寸得難いです。が、試驗紙に因れば誰でも容易に分かります。

小豆を速に、やはらかに煮る法

菓子屋などで重に用ゐる法は煮るとき竹の皮を一枚入れて煮るのです　又甘蔗或は砂糖を少し加へて煮るのです。

干鯣を速に、やはらかに煮る法

通例アク(灰と水との混合物)といふもの丶中に干鱈を三四日の間浸して置くと、非常に柔らかになります……さながら生のやうに。既に柔になつたらば、清水で幾度も洗ひ、それから適宜の味に煮るのです。

魚肉を骨まで軟に煮る法

山楂子の實を二三顆いれて煮れは骨の軟になると妙なり殊に著しきは鯔鰡杯なり山楂子は藥舖にあり又昆布卷の鮒は素燒する時魚の眼へ胡麻の油を箸に着けて少宛さしてよし。

又鯊は炙りて二三日風に暴しよく燥して煮れはよし。

筍を貯ふる法

生筍を久しくたくはふる法　先ヅ生筍を桶に入れ蓋をし河の瀬はやき所に埋め置べし但上に石を置べしなすびの類も同し。

又笋を根もとより切箆をぬき米糠のよくふるひたるを内へつめ口を紙にてはり三本つ丶藁にまき常に烟のかゝる竈の上につり置べし入用の時湯煮すべし色かはらず新なるが如し。

魚鳥類の漬様

魚鳥のかす漬法○魚又は鳥に塩をつけ半日以上一日一夜もおきて後水にて塩を滌ひさり紙にて水氣を拭去り糟に塩を少許いれよき程にかげんを付してつけ重石をかけ懺くべし、若魚鳥の塩強くば水に浸し塩を出してよしおしをかくるに蓋の周隙間あらば繩あるひは卷藁杯にて廻すべし隙間あれば風引き早く損ず糟損ぜざれば魚鳥も損ずるとなくそのかすを二度用ゐてもよし其時若糟堅くば酒或は塩水を加へて和らぐべし若又糟に換るに麹を以てせんとならば一日一夜の所を二日三夜も塩に漬置くべし塩よく染まざれば損じやすし。

精進煮汁の法

柿の皮干たるを醤油の塩加減して煮れは味美にして鰹の煮汁におとらず是僧家に重する法なり又昆布を煎汁を用ゐるには山椒を加ふれば味いよ〳〵美なり。

看病法一班

有名なふろれんす　ないちんげえる嬢が熱帯病院の看病婦に看病法心得書を書いて與へましたが、

なか／＼よくその要領を盡くして居ますから、是からその中を抄錄します。あとに出したのハ其第四章、「物音」と題する處です。

益にも立たぬ物音、または病人の注意を呼ぶやうな物音は全く病人に毒です。たとい高くない物音でも病人にハ大いな感動を與へます。

病人の内には單に物音ばかりで非常に感動する類が有ります。殊に時々おこる物音、あるひは俄に聞える物音などは一般に引きつゞいた物音よりは殊に病人の毒になります。急に病人を醒ますやうな物音はむしろ高くてそして引きつゞいたのより病人の神經を興奮させ、また刺衝し、大いな――取りかへしもつかぬ――害をさへ招くものです。

それ故に看病の秘傳はやたらに病人の目を醒まさせぬことです。眠ッたばかりの處を起されればもはや病人は寢就かれなくなるのか多いです。むしろ不思議とも云ふべきことです、病人が數分時間ねむるかはりに數時間ねむッた後は更にまた寢就くのも容易です。是には子細が有るので、丁度壯健な人と反對です。

病人の足を温めるには瓶に湯を入れてあてがふ、あれを行ふにも病人の氣に障るやうにしてはいけません。私が一度見た、熟練の看病婦は冬の寒い朝でも病人の目を醒ますのを恐れて却ッて足を温める瓶をさへ與へないで居たほどです。

私しが驚く事は醫者や朋友の無謀な事で――故意では無くて氣が付かず――病人の側へ座ッて永い間話しをして居ることです。病人に因てはこの時外の事にわざと考へを向け、その話しを聞くまいとするものも有りますが、このやうに工夫ずるのは實に大毒です。さうかとて病人に聞えぬやうに密話でもこそ／＼するのは猶さら病人への毒です。また足音をひゞかせぬやうにと思ッて故さらに足の爪先でひよいひよい歩いたり、または物をぐず／＼するのはまた毒です。いやな顏を爲るのは病人の氣にはさはります。熟練な看病人は物を手ばしこくしても物音を立てず、足をあたりまへにはこんでも決していやな感じを生ぜさせません。遲いといふことゝ靜かといふことゝは違ひます。看病人が大切に行なふべきことは手輕く、手ばしこく、そして靜かに行ふ、この三ヶ條です。

あからさまに醫者や朋友が病人の前でその病狀を打明けるのは忘れても禁じなくてはなりません。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

それ故に益にも立たぬ物音が病人を害するのは壯健な人を害するより烈しいです。

無駄な物音は（たとひ低くても）必要な物音（たとひ高くても）より病人に害をあたへます。

看病人が物音のする衣物を着るのも實はよく有りません。糊のつよい、がさ〳〵いふ衣物などを着て病人に接するのもあまり好くは無い事です。

物音をさせて戸を開くのもいけません。　また度々戸を開閉して物など出し入れするのもよくありません。

不注意な看病人が火など持ッて來て、おやまッてそれを取り落し、そのため病人の顔に言ふに言はれぬ恐怖をあらはさせた事などは毎度わたしが見た事です。

風や雨の工合で窓や戸ががた〳〵言はぬやうにするのが熟練な看病人のするまとです。　がた〳〵窓が言ひ出してさて病人の命令により、その防ぎをするやうでは看病人を働く効も無い事です。　命令する病人ならまだいゝです、命令は爲す、たゞ氣にかけながら終夜を明かす病人が多いものです。

すべて忙がしい樣子を病人には見せぬものです。　病人が何か命令する時には落ち付いて、靜に聞くものです。　で無いと病人の氣はいらだッて來ます。　そして命令を聞き了ッたら、また永く無駄にその前に居るものでありません。

すべて病人に向ッて何か言はうとする時には必らず病人の目の直に注ぐ處にすわッて言ふものです。　もし病人がその方を向き直すとか、またはその方に無理に目を向けるなどの事をすれば即ち身の毒になります。　話しかけられたもの丶方を向くのが人情です。　また此場合に、いくら病人の目の前に居るからとて、或ひは立ちなどして居て病人の目を上の方に注がせるのも不注意のいたりです。　出來るだけは身を動かさぬ方がよく、また物を言ふにも手眞似などせぬ方がいゝことです。

（以下次號）

親の恩

皆樣のお生れなすッた時御兩親のお喜びは譬へ樣のない程で寒い風にも當てず暑き日にも照されぬ樣に氣を注けて揷しの花掌の玉とめでいつくしまれムッがれば抱き眠れば寐かし、朝夕傍を離れずに常は聞さへ胸わるき二便の事もなにくれと世話して濡たものや汚れたものを身につけず、夜はオチ〳〵眠りもせず介抱して育てます。　かやうに苦勞いたゝま

してはドンナに達者な人でも中々身体のつゞくものではありませんのに何處の親でも苦勞から疲れて病み目づらひもせずに子供衆を育てあげますのは其子供を愛いがる眞心と子供が親々を慕ふ赤心と持合て持續くので厶ります。

皆様がまだ物をお云ひなさらぬ時分に一寸でもお笑ひなさるとアレ御母様御覽遊ばせモー坊が笑ひますよ、コレ御覽御母様嬢が喜びますよ、アー此花が嬉しいか、此物が面白いか、アレ坊が花を握々して喜びます、マー小供は慾がないネーモーお捨てかいと其罪なき唇を動し無心なる眼を以て母の顔を視つめる時は薔薇の樣な頬に喰ひつきたいほど可愛よく是が爲め夫婦の權執も解け是が爲め如何なる心配も胸から追ひ出されます。 まして他人がお坊ちやんの御容色のよいとお顔付きからお目元迄お母様丸寫しで實に御機嫌のいゝと、マーお嬢さまのお麗はしいとお髮際のおよろしいとお目元のお清しくッてお鼻筋のよいと……オヤモー御齒が立ちますよ、マヽホントにマアお可愛らしいお子で厶いますネー、一寸マア妾にもお抱き申さして下さいましな。オー見れば見るほど御發明の御相で居らッしやい升なぞと云はれますと御兩親の御喜びは嬉しくて丸で夢中で飛び立つ樣で厶います。

それから段々大きくなりますとアラお母様嬢が立したよ、お母さん嬢はアンヨは上手コロブはお下手。 下駄買て履かせましやう、下駄より靴の方が宜いでしやう、 今日はお天氣がいゝから上野の櫻を見に連れていきましやう、今日は淺草へ參りましやう。 あの人形か此玩具か是はいやか、あれがいゝノと子供の言ふ樣に買て下さります。 それから學校に行くやうになりますと行く前のと歸てからのと衣服のと髮飾のとハキ物のと飲食物のと何によらず毛ほどの拔目なく注意して育てゝ下さるので厶ります。

嗚呼御兩親はあんなに苦勞心配を遊ばして育てくださるのです。 それからまた行々はドンナ處に御嫁にやらう、どう云ふお婿を……近頃の流行はアーカウと行末の事から常平生の髮飾から履き物迄片時思はぬときはありません。 皆様も此御恩を御存知で厶いますか。 子を持て知る親の恩。 とても十分一も御兩親の御苦勞は知れますまいが知らずにゐては濟まないほど他人の親に比べて我身に考へ御兩親の御苦勞を安め萬分の一の御恩報ヒをしないではよし慈善會員であらうがなんで御ありなさらうがいらつめでは厶いません。 あの柔しく出れはつけあがり家の御母さんほど酷ひ人はないよ

妾の云ふとは一ッも許いては呉れはしないアヽおてんさんの樣なお母さんをほしいと云ふアバズレこそよきかゞみなれ手本なれ。

お鍋「アヽおれッたいホントにマアあのお竈さまは烟てばかしゐてチツトも燒えはしないワどうしたら直るだらうチェーッ」と獨で肝癪を起してゐると玄關番の書生が「お鍋サン直に烟るのをなほす法があるよ」「オヤさうどうすればいゝの」「別に六ッかしいとはあいッノ竈をこはしていゝのを買ふのサ」「コーン畜生め」「アヽ痛い」

小説

氏よりは育ちなりけり人はただ花はみよしの月は更科
花清し人も蓮の育から

繡鴛鴦

麴亭飯人

第二回　麗はしき隅田の春色

「紫陌の紅塵面を拂ッて來る、人の花を看て回ると道はざるはなし」。回るは、回るは看花の人々、さても夥たゞしき看花の人々、高島田の左褄は、尊所其處の某者にして、二子の羽織に、甲斐絹の前垂へ、さる處の主管にや。濃茶の高帽子に八の字の髭は、いづれ肩書の有りさうな紳士にして、引き詰めた丸髷に、黑縮緬の紋付き羽織は、定めし主ある夫人にやあらん。「衣は肝に至り、袖腕に至る」と犬殺し棒を携へたるは、「何事ぞ花見る人の長刀」とも評すべく、「一杯一盃又一盃」と瓢簞を提げたるは、「酒なくば何のおのれが櫻かな」とも稱しつべし。無苦つけき書生も、流石に書に因みの銀杏返しに心を惱まし、分別盛りの親方株も、爭でか花に緣りの喋々髷を忘るべき、粋な天神、乙なチョン髷、變な束髮、妙なザン切、十人寄れば十種とやら、各變ッた好みの打扮、あな面白の光景や、あな紛雜の人々や、さしもに廣き吾妻橋も押し合ひ、へし合ひ、踏みつ、踏まれつ、容易く得渡るべくも見えず。

△「春山さん、お怪我はなさいませんでしたか。」
○「いゝゑ、別段怪我……やあ、おとしたぞ、手帖」……
□「それは意外。」……
△「どうも雜沓ですから、しかし、まあ〳〵手帖位で可うおざいました、橋の中程で小生は實に押し殺されるかと思ひましたよ。」

○「處が手帖位ぢや無ソですよ、先刻書いた八洲園の圖が……わッ……是れは大きに粗相、中懐中へ入れて置いたのが、何時の間にか袂の中へ。……

□「ありましたか、それは宜うおざいました。」

△「何も春山さんの御熱心には、毎度感服いたします。」

□「ほんに然ですねえ、あ、喫驚させやァがッた、馬車の別當奴。」……

看客よ、是を何と判じたまふぞ、そは作者の說き明しを俟ずして、彼の畫家春山芳香と、同じ教員同寮なるレース學校の某がし達との看花回りの談話と八、早くにも推したまひつらん。斯くて歸さを急ぎつゝ、さしも打ち群れたる人々も、皆散々に散り行きて、待乳山に月さし出つる頃、全く人の影たえにき。

襟元に付くが世の習ひ、流行を好むが人の心、さても果敢なき世の中かな、紫陌の紅塵面を拂ふて雜遝の中、殊には花も柳も只その紅塵に塗れ、生酔の戯歌に、黄鳥も三舎を避けて寄り付かず、學生の競漕に、都鳥も三里以外に退去せられて、言問はんといふ風流才子もなし。かゝる折を我も我もと、打ち集ひて、稍日落ち人去る頃は、又侶共に立ち歸る、されば看花の名はあれども、實は人見に來るにやあらん。抑看花に宜しきは、靜かなる時にあり、雨の少しく降る日、月の出でたる夕、霞こめたる曉、なぞと眞面目に說き出でん八、中〳〵に看官に烏乎とやいはれん。實に烏乎なり、作者より猶くはしきは、吾妻橋詰の交番所に、詰め合はせたる巡査、某かしなりけり。それ彼の巡査某がしが、先程より堤の其處此處を俳徊しつゝ、獨言するを聞けば、

「麗はしい隅田の景色、眞に麗はしい隅田の景色、朝夕は實に譬へ樣も何もない、殊に夕の景色、月の待乳山に出た塩梅から、吾妻橋の倒さに水に映ッた具合、それに晝小舟や何かで碍けられた都鳥も、暮方から稍その處を得たといふ有樣で、柳の影で三ッ四ッ五ッ白く見れて、動かぬ樣で動くやうで、そして水も又稍澄みかけた處へ、中々さうは參らぬといふ積りか、霞の衣を着たまゝの櫻が、殆ど水の中央まで掩ひかゝッて、川の半分を朧にし、又半分を暗がりにすると、待乳山の月は意地わるくも、樹の間を洩れて、時々波の頭を閃めせる、只憎らしいは此の景色を打ち破す屋形船の棹、此の景色を見捨てゝ割烹店の爪彈き、あゝ、思へば思へば巳程不幸な……、商法で失敗する、火災

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

で破産する……時が時なら斯ンな事をせむとも……、あゝ、馬鹿〳〵しい。それハ然と最大抵交替の時間だらう、景色に浮れて、つい下らない事を思ひ出した、馬鹿〳〵しい。」

そも此の巡査は何者ぞ、想ふに是れハ士族の果にて、打ち積く家運の拙さに、遂に些の財産も沒なり、露命を繋ぐたつきにとて、やがて巡査となれりけん由、今此の獨言にて知られたり。斯くて柳櫻の下をかい潜りて、交番所に至らんとする路の此方に、紙片やうの物落ちてあり、何かの袋か、鼻紙にやと思へば、別に心も注めず、行き過ぎんとして角燈の明りにフト見れば、正しく書簡なり、手に把り擧げて右見左見つゝ忽ち額に皺を集せ。

「はて不思議な此の書簡……それにしても彼奴が……どうも疑がはしい。」

何か心あたり有るが如く、又無きが如く、暫ばし思案の体なりしが、やがて思ひ決めたるにや、角燈を櫻の根方に置き、封じ目を引き切りて見れば、只一枚のレースにて、書簡めきたるものもなし。

「これは妙た、何だか譯の分らない書簡だ、やア驚嘆が繍てある、文句は何だ、幾久しう……ハテどうも……實に。」

……

俄に目を釣り揚げ、唇を震はし、呼吸さへ劇しくなりて、胸ドキ〳〵と轟ろくを、押し鎮めつゝ氣を取り直し、やがて交番所に歸りければ、恰も交替すべき時刻にて、替りの巡査は外に佇立つゝ俟ちて居り。

「如何も御苦勞でした、丁度今九時打ッた處でした。」

「さうですか、ぢやア直御免蒙むッても可おざいますか。」

「宜しうおざいます、……貴君お顔の色が大層お惡いやうですが、如何か成ッたか。」

「なに、体した事もおざいませんけれども、些し腹痛するので。」……

「それは不可ませんねえ、お大事になさいまし。」

「有り難う存じます、ぢやア御免下さい。」

爰に交替して立ち別かれ、我が家を指してぞ歸りける。」

起きない前に朝飯を食べる法はありますまいかと一人の懶惰が問ふと一人の老人が左様サ寢がけに握飯を持て床にいけぞよいと答へました

論説

婦人の從順

幼くして父母の膝下に居る間は父母に從ひ已に人と成りて他人に嫁したる後は夫に從ひ老年に至て其子一家の主宰たるに及んでは其子に從ふと云ふのが日本婦人の敎でありますから婦人は生れて始めて天日を見るの時より死して終に黄土に歸するの日に至る迄常に男子の下に立ち一日も獨立して自由に働くことが出來ないので結局温柔を以て性とし卑屈を以て德とする有樣に陷り絶て活潑敢爲の氣象と謂ふものがないとは日本婦人が屢々被むる所の叱言であると考へます。乍去婦人が從順で無ければならぬと謂ふ敎は夫程悪い敎であるか夫程害の多い敎であるか此敎は夫程日本の婦人の性質を殘ふたかと尋ねますれは數百年來日本人が敎と立てたる婦人の從順と謂ふことは全く癡人の一大妄想とも考へられませず又文化が如何が進みたればとて決して此敎に依らずして一家を成すことは出來ませす。

一家は一の体でありまして全く互に關係の無い人の同居とは性質が異て居ります。無關係人の同居ならば吾も人も各自分の考通に事を行て行きますが一家に於ては相互に一致共同して事を爲すのが其本体でありますから夫は夫の考を以て之を行ひ妻は妻の考を以て之を行ふ樣では到底一家の幸福を得られないのみならず之に一家と謂ふ名を付けることも出來ませす。小いながらも一家には一家全体に關係した事柄があります。然るに夫婦親子皆其考を異にし面々其考を實行しやうとしますれば世間の交際は勿論は平生食住の事迄も決して運びは付きますまい。夫故に折合の付くことは可成折合を附けることは勿論なれども如何しても折合の附かざる場合に其決斷を爲すべき人が必ず無くてはなりませぬ。一家に主宰の無きは人間に腦髓の無いと同じく又蒸滊車に機關車の無きと同しく一家と謂ふ團体を組立てることは出來ませぬ。以上陳べました通一家には一人の主宰が必要である一人の考を以て一家の考を定むるものが無ければならぬとすれば夫が其任に當るべきか妻が其任に當るべきか此問は今更喋々之を辨ぜずとも明白の事と考へます。故に今日の問題は男子は女子を抑壓す可きものなるや否やの問題では無くて男子が一家の頭と爲て女子を支配すべきか又は女子が一家の頭と爲て男子を支配すべきかの問題であります。扨て此問題に付ては誰しも之が答に躊躇するものはありますまい。妻が夫の支配を受くべきと同しく子女が父母の膝下に

在る間又其子が一家の主宰となりたる後は其主宰の意見に從ふを是亦現今親族の組織に於ては一家の幸福を維持するが爲已を得ざるとであります。　去れば婦人が從順で無くてはならぬと云ふ敎は穴勝痴人の妄想でもありませぜん又有害無益の敎でもありませせん、

斯く言へばとて男子は如何に女子を壓制するも可なり、女子は如何に不條理あるを知りつゝも男子の言行に對して啄を狹むとを得ずと申す譯ではありません。　可成丈婦人をして幸福ならしめ婦人の望に從ひ已を曲げても婦人の心を滿足せしむるとを務むれば勿論男子たるものゝ義務であります。

彼の主宰權を行ひ婦人を支配するは實際已を得さる場合に限ること是亦勿論のとであります。　乍併結局の處に至ては女子は男子の意に從はなければ到底一家の破裂を生するより外はありません。

又女子の方より言ふも夫の言行に不條理なる所ありと知りては屢々之を忠告し其足らざる所は可成丈之を補綴するとは少しも妨なきのみならず却て其義務であります。　只其意見の用ゐられざるに及んでは法律又は社會に公認せられたる道德に反かざる限は夫に服從するのが其義務であります。　昔より夫を諫めて其過を救ひたる例も日本に少なくはありません。

其他已を得ざる場合には難に殉し節に死したる婦人も隨分ありますが日本の道德は決して是等を惡事とせざるのみならず傳へて千古の美談としますから彼の三從の敎の如きも只男子の命是從ひ男子の言行に付ては一言も啄を挾むとか出來ないと云ふ主旨ては無く最後の場合に至り已の意見の用ゐられざる時ハ男子に從ふの意味であるとハ明白であります。

歐州と雖も決して此外にハ出でません否苟も結婚なるものゝある以上ハ如何なる文明國と雖も此規則を欠くとハ出來ません。　歐州諸國の歷史を讀み「ジョアン、ド、アーク」の事跡に至り又「ローラン」夫人の事跡に至て婦人の節義ハ斯くの如きものなるかと感ずるハ大なる誤でります。　或ハ强敵を破て一國の安寧を復し或ハ政治界に立て牛耳を執るが如きハ畢竟事の變体であります。　人の行爲ハ其位置に依て異なるものであります。　若し此両女丈夫が全く異なりたる位置に生れたので定めて賢母良妻と爲たでもありましやう。

臣をして良臣たらしめよ忠臣たらしむこと勿れと唐の魏徵が申しました。　實に良臣と言ひ忠臣と云ふも其基本ハ同しであります。　只時世に依り其現ハし方が違ふので良臣が正

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

則て忠臣が變体であります。　烈女も亦之と同しく賢母良妻の變体でありますから其事跡を讀むものは決して其外形に現はれたる行爲を慕つてはなりません。　先能く其行爲の基本たりし性質を玩味し其性質を他の方向に働かせなければなりませぬ。　婦人の期する所は只烈女とならずして賢母良妻となるに在る耳。

文藝美術

左の和文變遷は新保磐次氏の著したる高等日本讀本卷の八より著者の許を得て轉載したるものにて和文の變遷を四期に分ち述へたる最も有益なるものなり

和文の變遷（其一）

諸子は既に盛衰記太平記の文を讀み或は躬恒、忠岑等の長歌及び短歌をも讀みたり。　之を新聞の雜報に比へて見ば何と無く古雅にして稍耳遠さを覺ゆるなるへし。　諸子は又嘗て赤人の富士山の歌を讀みしが今猶之を記臆するか。

「田子の浦に　打ち出でゝ見れば、眞白にぞ
　富士の高嶺に雪は降りける。」

又赤人の富士の長歌ありて、今の學校唱歌にも用ひられたれば、兒童等或は知るならん。

「天地の
別かれし時に神さびて、　高く貴き、駿河なる、
富士の高嶺を、天の原　ふりさけ見れは、渡る日の、
影も隱ろひ、照る月の　光りも見えず……。」

と云へる是れなり。　こゝに至りて諸子は益其耳遠きを覺ゆべし。　實に太平記は五百年前の文なり躬恒、忠峰は千年前の人なり、　赤人は更に古きこと百五十年なり。　是れを以て見るに文辭の世を逐ひて變遷せしと知るべし。

余は試みに今一段古き文を尋ねて諸子と共に讀まんと欲するに、　恐らくは諸子の聞き知れる者無からん。　否こゝに一あり。　神官か神前にて「高天乃原に云々」と讀むは諸子も屢聞きしならん。　これは、上古朝廷にて、國民が過ち犯せる罪咎を神に申して祓ひ宥むる由を告示し給ふ文書にして、大祓ひと稱せらる、其の編纂は蓋し二千年の古に在り。

其中に、罪咎を拂ひ清むる譬喩の言あり、曰はく

「しなどの風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝の御霧、夕べの御霧を朝風、夕風の吹き拂ふことの如く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大津邊に居る大船を舳解き放ち艫解き放ちて大海原に推し放つことの如く彼方の繁木が本を焼鎌の利鎌をもて打ち掃ふ事の如く………。」

諸子は愈益其の耳遠きを感ずべし。よし、余は諸子を苦しましめんことを欲せず。諸子にして之を好む者あらば暫時中學以上の課程を待つべし。然りと雖も余は猶一言せん。今示したる文の如く過大なる形容、譬喩を疊み掛けて云ふは則古文の重なる性質にして、其の美は多くこゝに止まりき。

余は是れより赤人の時代に返らん。此時代には漢文獨行はれて、上の如き日本固有の文章則和文を綴る人無りき。然れども和歌は甚盛りにして、柿本人麻呂及び此の山部赤人最も歌道に長ぜり。但し和歌も亦和文の一種にして唯調子を整へたる文章のみ。

人麻呂は赤人より稍先輩にして持統、文武の兩帝に仕へたり。其の官職卑しかりければ、委しき履歴は世に傳はらねども、歌聖の名は千歳の後に輝けり。人麻呂の歌にして人口に膾炙せるは彼の百人一首の中なる

「あしびきの　山鳥の尾のしだり尾の
　長〳〵し夜を獨かも寢ん。」

と云へる者なり。其の上の句は唯長〳〵しと云はんが爲の序なり、譬喩なり。かゝる序詞を以て巧みを取るは亦古文古歌の重なる性質なり。

「乙女等が　袖ふる山の神垣の
　久しき世より吾れは思ひき。」

と云へるも亦此の人の歌にして、其の上の句は久しきと云はんが爲の序なり、而して乙女等が袖と云へるは亦ふる山なる地名の序にして謂はゆる枕詞と云ふも此の類の滑稽に過ぎず。

人麻呂の妻人麻呂に別るゝ時

「勿念ひそと　君は云へども逢はん時
　いつと知りてか吾が戀ひざらん。」

と云へるは眞情を述べたる者にして、譬喩もなく滑稽もなし。眞實、率直の歌は此の時代に最多し。諸子が知れる「ほのぼのと明石の浦の朝霧に。」の歌は人麻呂の作と云ひ傳ふれど誤りなり。人麻呂の短歌、長歌は此の時代の最優美なる者なれど諸子の爲には猶耳遠きの恐れあり、故に余は唯赤人の事を一言して以て此の時代の話しを收めんとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

赤人ハ聖武天皇の朝に仕へたるが、官職卑く、履歴詳かならざること人麻呂に同じ。然のみならず歌聖の名も亦人麻呂に肩を並べたり。紀貫之と云ふ歌人曰はく「人麻呂は赤人が上に立たんこと難く、赤人ハ人麻呂が下に立たんこと難くなんありける。」誠に此の人の長歌には華麗豪爽古今獨歩の者多し。

此の頃よりして桓武天皇遷都の頃までの歌を集めたる書は萬葉集なり。其の歌の體裁皆相似て謂はゆる萬葉風なり、上古の歌文と共に總稱して古體と云ふ。

日本美術零史漆器の部

日本諸美術の零史を是から掲ぐる手はじめとしてまづいらつめ方には緣の近い漆器からはじめましやう。

漆器はすなわち漆細工をすべて指す名で、凡そ漆で仕上けた美術品をば漆器と言ひます。

漆器の歴史に入る前、その第一の材料たる漆の事をあらまし說くのは多分自然の順序でしやう。

漆は木の名で、それから取つた脂をも漆と呼びます。漆細工はこの脂で塗るのです。丁度桃の木に疵をつければ其處から脂が出るのと同じく、漆の木にも切口をつければ其處から汁は流れ出ますが、しかし、澤山に出る物では有りません。これがために漆の木の培養法も中々面倒なものですが大した必要もない事ゆゑ此處では述べません。その僅に出た汁を丹精して清潔にし、その品位により上中下の等級をつけます。日本古代の漆細工はよくその下地の木やまたは金を撰み、また下等の漆をばつかいませんでしたから、實にその神韻のある事、その牢いこと、後世比類は有りません。後世に至ッては濫雜に製造し、すこしも長持の事をば思はず、下地の木なともナマガレのまゝ用ゐますからその漆細工を乾燥な土地へ持つて行くか、水に浸すか、または日につよく當てるか爲れば忽ち剝げたり割れたりします。今日新製の安い吸物椀など、一年も用ゐぬ間に早くも剝げて不体裁になるのも全くこの故です。たゞに吸物椀のやうな物ばかりでは無く、中々見事な書架、硯函などをさへ疎漏につくつて安賣とするため、一年と持たぬものが澤山あります。

後世の濫雜な漆器は前に述べたとほり取る處は全くありませんが、しかし古代の物に至ると、實に世界第一です。

古代の美術家が漆細工をつくる苦心は洵に恐ろしいもので

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

す。第一材料にする木をえらみ、いくら好ん木でも充分に涸れ切らぬ間はどうしても用ゐません。十分にかれたと見留をつけた處で、さてどうするかと言へば之を薄く切つて、その上に絹を張ります、で無ければ木の面を思ふまゝに磨きます。この木を涸らして磨き上げるまでに既に餘程の時日を過ぐします。それから次第に漆を塗りはじめますが、その漆を一塗してそれを乾かすのに大抵二ケ月ぐらゐは費し、さらに其處を磨くのにまた少なくとも一ケ月余は費し、猶あらためて塗り、又磨く、かうして塗り或は磨くにはいつも一二ケ月は過ぐるものでさて、念入りの物を製するには五十遍ほども塗ッたり磨いたりします。それ故一の漆器でも五六年を費して始めて出來上げるのは珍らしくも無いほどの事です。

古代の美術家の丹精もこれほどです。最上の物が出來たのは無理は有りません。そしていつ頃から日本に漆細工がはじまッたかと云ふに、中々ふるい事です。或は日本の漆細工は支那から傳來したといふ說もあります。しかし、この說にはまだ信を置けません。此處では傳來の事などには言葉をつひやさず、只直に日本古代の漆細工が現にまれ〳〵に知れて居る處から述べましやう。

漆細工のまだ盛にならぬ前は漆の物をこしらへても甚しい華美の物は出來ませんでしたが、聖武天皇の頃から段々精巧な品が出て來ました。その中一番簡略なのは平文といふ塗方と平塵といふ塗方とです。平文とは金銀を薄く伸べ、それを平面に漆へ塗りこんだ物で、たとへば短冊に金箔が置いてあるやうな塗方です。平塵の方はそれと違ひ、今日の梨子地のやうなもので、梨子地よりは金粉の粒が大きいです。

これらが此時代の普通でしたが、しかし技術は一層〳〵すゝみ、螺鈿、玉入、石入、及び抹金縷などの諸法さへ出ました。螺鈿は人の知るとほり、青貝などを塗り込んだもの、玉入も石入も玉や石を嵌したものですが、しかし抹金縷はこれらより一層たくみな物で、即ち幾段にも金の層をつみかさね、之を漆で塗りかため、磨き上げたもので、手で觸れゝばはなはだ滑かですが、しかし目で見れば金が色々に高低して居るやうに見ゐる塗方です。これの簡略な見本には今日の若狹塗が有ります。これは抹金縷では有りませんが、体裁は一寸似たものです。

聖武天皇このかた公卿政治の世の中の間も亂もありません

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ので次第に漆細工も進んで來ましたが、やがて源平二家の爭ひが出來て、天下が騒がしくなるや否や俄に折角の頼もしい芽もしぼみました。　その後天下が定まり、頼朝が覇府を鎌倉に建てゝからまたやうやく保護を得て漆細工もふたゝび運を恢復し、終に瞬く間に殆んど漆細工の歴史中第一番の最上時期をつくり出しました。　（以下次号）

曙の春

美妙齋主人

花ぐもりとか言ふ空、花香るとか言ふ風。　高殿から見わたせば、まこと慈鎮の和尚の言葉も思ひ出されます。　更け行く月を惜しんで、鞦韆は黙くも、影のまゝに影を移す夜をあはれと見たのも、曙のこの美くしさを忘れ果てゝ居たからでしやう。　優美！　春の精が優美か、優美が春の精か。

むしろわれ〳〵の汚れた髏も――梅の香に染まぬ墻の桃――心から洗はれて、むしろわれ〳〵が昨日まで徒らに天に抱いたわだけ無い怨みも、むしろ今は跡を潜めて、この自然の美を分解する目を、それでも、與へられた、花の嬉しさに――肉はたをやかな風にやはらか、そして心もうらゝかな天氣におだやか。　「今日見ずば明日は雪とぞ……」、花ををしんで筆に寄する才はむかしの人に及ばずとも花を惜んで夜半の嵐を妬む情はどうして譲りましやう。　朝開――たゞ消いと言つて充分でしやうか。　人の鐵が摘んだばかりで持つて來た朶、取り上げてみづから駒鳥にやるその嬉しさ。　身ぶるひをして、咽喉――銀の鈴を振る咽喉――をふくらし、愛らしい口を一杯に開いて、此方を稱へるやうな姿の愛らしさ。出來ることなら手をさしいれてその頭やろの羽翼を撫でゝもやりたいばかりなり。

人も同じ心か、朝起きたまゝ手馴らしの須磨琴をさら〳〵とさせて居ます。　庭づたひに池の水をすべッて來るその響き、風を受けぬ松はさぞかし怨むでしやう。　綾をかんだ春雨がまだわづかに上ッたばかりのところ、水際の若草はいづれも身の長をくらべて、紬に白玉をつゝッて居ます。　濡れ果てゝ猫の足痕にも――あゝ春――花をとゞめる十の間。　早落ちる桃が波のまに〳〵おだやかに浮いて居る岸の石の水。魚の肩のあたゝかになるのも早五日六日。　いざ晴れたらば鳩の音もしやう、それを聞くのもまた樂しみ。

昨夜までの厚着がにはかに薄くなッた心地のよさ。　肌の味もまが身づから何處となく膩いておめらかです。　昨夜臥

床に入るとき脱いだ肌着、それもその儘腕にとほらず、今朝は一つ綿いれのしどけ無さ。　人には會はれぬ姿、しかし閑に我の外には春よりほかの相手の無い時には中々の心たのしさ。　香水のかをりは花ですでに十分。別に香を求めては焚く煉香。　大内と打ッた銘――ならば此處は吉野の行宮か。美くしい隣りの少年が――それも正行の面影――金泥塗骨の扇をかざしに來るのも床しく見ゆます。

　人をはなれて身を天地とし、更に身を脱して身を春と見ても、また身を春の人としても味は千萬無量です。　あゝ春！　萬物の母、慈善の姫、むごたらしい冬の怒りを和らげて、あどけなく、愛敬づいて池と共に閉ぢた胸の氷も解く力のありがたさ。　清らかな瑠璃の空にたなびいて居る紫の雲、その雲に薄紅の肌のまゝやはらかい腰を掛けて、わらッて下界を流目に見る想像の天女。とでも思ッたらはじめて春の姿が會得されましやうか。　春三月、日數九十日、曙の春、夜半の春、およびまた晝の春。　しかし、美くしさは暮れの春に名春をとがめて、そして婉しさは曙の春が女王です。　いたましさ、おだやかさ、うら〳〵かさ、清さ、いづれも皆美くしさの本。しかし、ことさらに撰めば、清さにまさるものが有りましやうか。

　我れに何の徳が有ッて、われに何の靈が有ッて、あの美くしい天地に身を置くことが出來るのでしやう。　仰いで天を望めば天は無心、俯して地を見れば地は無心、横さまに森羅萬象に問へば森羅萬象も無心！　茫漠として限の無い宇宙にいつか空蟬の身は露と消ゆるこの我のはかあさ、そのはかないものに賜はる天の「美」、これを尊い道理の惠と言ッても、しかし足らぬのは感謝の言葉。　趣を更へてやがては夏も、秋も、冬も來るとは――まこと、更に思ひかへせば、ああ、人間！宇宙の粹を見るための人間！

さくら狩

關　みな子

　さくら狩とは床しい名！　婦人といふ言葉はおのづから千萬の情が籠るやうに思はれるのと同じたぐひ！　浮かれ出る徒らの人に顔を見られるのは何處やら耻かしく、ことに心あひの讀の友とつれだつからには野邊の一本さくらを狩るのが却ッて心安いです。　隅田を行かず、上野にのぼらず、廐崎の此方から草ばかりめぐんだ畔を傳はり、駒下駄をうつしながらも人影さへ少いのが何より嬉しく、しづかに草のや

のやれ垣に我れ春占顔の君を見出してはその見出した人の願を小兒らしくも互にあらそふばかり。立ちよッて見れば塵とはなれて而も淸く、かざらず立つ身を訪ふたかとも云ひさうな花の風情！。意でむかへた眺は元より。しかし滿足を物に與へた心よさ。いかが、「自然」を愛する心のかたはしはまづこの位の處にあるのでしやうか。

四月のはじめ　庵崎の　みな子。

月花見立　みな子

その一　有明の月。對は　寒梅。

「何をしのぶとなけれども」と唧ち、また「よしのゝ里の雪」とたとへたそのむかしもすべて淸い中に冴ねた處を持つ心でしやう。おのづから立ち超た風情はたうといもの〳〵、しかし哀れをむかへる身に染みとほる味はいづれ劣らぬながめです。

その二　夕月。對は　白蓮。

氣高い氣はひ、しかし淋しい風情。晝の間の埃、嫩風の塵、受けても受けぬさまのしはらしさ。茂林にかへる鴉を惜しさうに見送る處、やゝ潜む小鯉の鰭にわづかふるへる体いづれも無常、はかなさ、しづけさを含んだ一對。

その三　かたわれ月。對は　柳の花。

「滿村疑得楊花雪。啼鳥聲寒昧爽風」。寒氣なのが柳の花のおもむきか、まこと肌にくるしい姿。しかし、どことなく、おのづから自分だけに足りたところが有る体、美くしさは鏡に及ばぬながら猶横櫛の銀泥をあらはし、あでやかさは梨に劣りながら猶白金の光りを凝らして居ます。

その四　落月。對は　白菊。

山をふくむさまは燈の消ねかゝッたのと同じくをさまり初めた光が更にしばらく蘇るやうです。霜に殘る姿は斷えかゝッた焚物と同じく、自然の香りがかすかに糸筋を引いて居ます。

あはれよりはむしろ撓まぬ、おとろへぬ風情が目につくばかり。常闇も抑へてまだ山の端を襲はず、冬もためらッて猶園の中に侵し入りません。

東台春夜　麹亭主人

支那の律侍にならひて對をつくり、また韻を用ゐたる今樣長歌。

さくらが　をかも　ゆふ　されば
　おほかた　ひとの　こゑ、たえて、
ほのかに　かぜれ　かほり　つゝ、
　おぼろに　つき　ころ　かすみ　けれ。
うたげや　すらむ　はなの　おく。
　あどの　ねす　なり　くもの　うへ。
それか　あらぬか　たかどのに
　みゆるや　ほかげ、ほしの　かげ。

霽れぬる宿ハ霞にうづもれて谷の鶯ひさ聲ぞする

口畫の解

ふナん　ほふエるの人馬、これには右と左との二つが有りますが、左は次號に出すこととして此號には右のみを出しました。　駿馬が奔逸しさうな心ぐみ、若者が引きとゞめる樣子、体格のさだまり方、實に申分は有りません。　若者の右の肩の薄衣は何の益にも立たぬやうにも見えますが、決してさうでありません。　馬のかたくなと人のしッかりとの間に一種風になびく柔らかな物が有るので言ひ盡くされぬ情が出

てゐます。

第二は「おぼけなさ」といふ題名で、平和の眠りに夢を護らせて居るおぼけない人二人の体です。　兄弟二人の愛情が無言の間に滿々として、深くも寢入ッて居る風情、薔薇の花を持た手付の罪のない工合、技術家が苦心したところです。

これに限らず、すべて裸体像は体格の整ッて居るほかに、また外物の補助なしに顏容と肉の加減によッて精神の情致をあらはすのが主眼で、美術の中にも最も上乘のものです。

ことからこの類の物を色々出します。　今度のは摸寫があまり旨くありませんでした。　次號には左のものを出します。

獅子に騎ッた天童（羅馬のびねないめい作）

日本俗曲に付て　　おもし樓藝仙

御古い風調（も大層ながら）の歌を以て時時御機嫌を伺つた弊社の藝仙は一体氣まぐれ者で、是まで弊社にても別物と致し、達磨さん同樣に棚に上げて置いた人物で御座い升。　此の俗曲論などは殊に僻說、むしろ暴論※記者などは勿論同意を表しませんが、同人一己人の資格を以て投書するのだ

と申し張り、其の中には一理無いでも無い處も見えますれば、看客方の御參考までに其の儘掲げます。

記者識す。

日本の俗曲には猥褻の文句が多いとは一般の説にして、先年來頻りに頭痛に病む人多く、既に琴歌の添削改良せられたるもあり、改良長唄なども出來、殊には近頃流行の新体詩、是れには唐人流の譜が付いて當雜誌などにも屢モヤシ豆の行列を見ると申すは誠に目出度き事と申すべし。改良唄や新体詩の目出度き事はさるものなきぞ、日本俗曲の猥褻なると云ふ一段に於ては藝仙などには皆目解し能はざるなり。

俗曲の中には時として遊廓の事を綴りたる者あり、「霞の衣衣紋坂」又は「萬吉原、山谷堀」の如し。是れ等は文句の優美に拘らず淑女紳士の擯斥を蒙むるも、矯飾の今代には已むを得ざる事と明らめもせん。之を措きては唯戀に關係したる文句多しと云ふのみ、其の最多情艶靡なるの極と雖「癪に嬉しい男の力、ジット手に手を何ンにも云にず」、位の者なり。「男女七歳にして席を同じくせざる」主義は既に往きぬ。手を握りて相親み、身を投げ掛けて相抱き、病苦憂鬱相慰め相扶くるは西洋道徳の禁ずる所か。「抱く」「握る」等の字を見れば即ち之を猥褻と云ふは、豈青き眼鏡を掛けて見るの故にあらぞや。之を越ねてアラレモナイ境界に立ち入りたる猥褻の文句は（道路の飴賣の放歌を除き）藝仙未だ之を聞かず。

キッスは親愛にして、頬をオッケルは猥褻なり。ラブは高尚にして、ホレルは猥褻なり。洋服あれば腕を引つ掛け合ふも禮節にして、蛇の目なれば合ひ合ひ傘も猥褻なり。「失念と云へば立派な物忘れ」古往今來、ああ、不公平の世や。

よしや日本俗曲は眞に猥褻の性質を具ふとするも、音樂歌曲は其の時代の氣風品格を表する者なるをいかがはせん。博士等の一夜作りの唱歌に例のモヤシ豆をこじ付けて、相も替らぬ松の千歳や國の爲を流行させんとしても、猥褻……諸君が所謂猥褻……の世に生れたる人民は斯くの如き者を歌ふことを樂まざるなり。已むを得ずして之を歌ふも到底錦の中の糞土に過ぎず（もしも猥褻なる人民ならば）。況や或る大家の演説に「猥褻の歌曲をばドシドシ政府より禁止すべし」と云ふに至りては人爲、否、乱暴も亦甚しと云ふべし。唐人の國の前例ありとて、其れが何の根據にかなる。所謂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

猥褻の世には其れ相應の娯樂あり、無暗滅法に禁止せられてオダマリ小法師のあるべしや。

左許り俗曲俗曲と輕蔑してもマサカに捨て兼ぬる處もあり、左は云へ「戀」の字や「は」の字があれば直ちに猥褻と斷定する眼鏡先生ば、この雞肋俗曲を料理して、猥褻の字をば削除し、或は猥褻ならざるも我が意に合はざる文句をば遠慮なく削添せらるる向きもあり。是れ實に餘計の事と申すべし。古人の作は無暗に添削すべき物にあらず、取り分け歌曲の類は譜と文句と相離すべからざる者多きをや。

藝仙は唐人流の「ドレミ」は丸で不案内なり、笙七力の「トウトウメラリ」是れもよくは知らず、琴唄長唄もチト覺束ないが、清元、常磐津、端唄の類に至ては矢張承知致さず。是れ即ち何ンにも知らないと同じ意味なるか、そは兎も角も寄席の音曲や俠客の兄イのそそり節にて聞き覺ゐる處にても中々以て猥りに文句を動かすべき物に非るを知れり。吾れも人も善く知る處の夕暮など即ち其の例なり。

知つたぶりは甚恐れ入るが、藝仙に勝れる盲蛇が若し在らばと假定して委しく申さんに「夕暮云々隅田川」と云ふ迄は通例の手にて、次の合の手は溶溶たる流れを摸したるが

如く、忽ち高調子に上りて「月に風情云云」と云へるは如何にも冴え渡りたる月の中天に上るの氣象あり、「明月升二東海一空シク想フ出塵姿。」作者の名さへ床しきなり。さて「帆懸けた舟」には櫓拍子を摸し、「鳥が啼く」には鳥の聲調を寓し、結末又通例の手を以て收めたり。其の他人々に膾炙せる物には京の四季の秋冬に至りて鐘音を發するの類。梅にも春の「若水汲みか車井戸」の上下の音「朝日に繁き人影はもしやと思ふ戀の欲（猥褻猥褻）」其の往來の賑やかさ。俠客の兄イの最も好める玉川は温柔の字面に凄涼の手を着けたる如く、自然の妙とは云ひ難きが如くなれども、實は「玉川の水に晒らせし雪の肌」より出來りたる緣語を以て仕立て「積もる口舌の其の中に、解けし嶋田のもつれ髪」さて合ひの手に、雪降りの調を用ひたるにて其の用意の深きを知るべし。

是れとても「積もる議論の其の中に、解けし束髪の乱れ髪」としたらば大に改良の趣意にも叶はんか、なれども吾が輩は之を聞くことを願はざるなり。

古人の作を愛翫するは其の人の尊貴なるが爲にもあらず、其の作の必しも上出來なるが爲にもあらず。石屋の鐵公が朝飯前に作りたる燈籠も年を經て苔むすに至れば新たに斧鑿

を加へて其の形を直すに忍びず。ましてや名工の苦辛をこめたる物に於てをや。猥りに之を添削し或は替へ歌に交換せんとするは無骨の土天上と云ふべし。古へより替へ歌を作るもの其の數を知らずと雖皆一時の興となすに過ぎずして、長く後世に傳はる者百中に一二も無し。是れ皆原作の文句と譜と相離るべからず、一ありて二あるべからざるの故にならずや。

然りと雖人各思想を述ぶるの權あり、俗曲を禁ぜんと云ふも可なり、添削せんと云ふも勝手なり。「花に住む鶯、水に住む蛙」に劣らじと新体詩を作るも軍歌をドナルも銘銘の隨意なり。況改良とは本來惡氣より出でたる事に非るをや。唯恐る吾人は至て輕躁なる人民なり、雷同し易き人民なり、自國を輕蔑する人民なり、嘗て古法眼の畫を紙屑屋に賣りし人民なり、嘗て向島の櫻を倒し、松嶋の松を伐りし人民なり、而して、而して今は美術に狂奔大呼する人民なり猥褻論にして一朝盲蛇を眩惑、雷同するに至り、藝人社會の如きは其の論の信僞を知るの力なく、唯上等社會に擯斥せらるるを憚り怕れ恨みを呑で改良の仲間に入らんには、長く日本俗曲に猥褻の汚名を負はせ、剰さへ前人の名作を點竄し、錯亂し、忘却し、煙滅し尽すに至らん。御やかましう。

柳櫻都錦絵　二幕目　立花家かなる作

本舞臺三間の間中足の二重、三方折り廻し本椽つき、此の下船板の靴ぬぎ、風雅なる拵へ。二重上へよせて水屋茶道具をならべ、此の側丸窓口の出這入り、上下建仁寺垣にて見切り、位置より飛石を据え、石燈籠紅葉の立木など例の處へ枝折戸日覆より紅葉の釣枝、都て淸子部屋の体にて二重上手の机に向て先太郎新聞を讀みて住居、少し下手に淸子据はり、此模樣宜しく、琴唄にて道具止る。

（淸）永の間の御酒の御合手さぞ御疲れでムり升う（先）當春よりは激務の爲めろ酒を飮めども醉はざりしが今日は諸君と共々に思はず數盃をかたむけて少しは醉ふた樣なれどのぼせる故か頭痛が爲るでい（淸）それは困ッたとでムり升す御藥でも差上ケ升ふか（先）イヤ夫れよりは一服立てゝ下されゝ（淸）なる程夫れも宜しうムり升す只今立てゝ差上升」と淸子は水屋より茶道具を出し袱紗を以て茶の湯の件琴唄にて宜しくある先太郎は此の間新聞を見て居る（淸）不手際なから召し上りませ」と茶を出す先太郎は之を飮み（先）まこ

とに酔を解くのみか精神忽ちすゞしくなるは全く銘茶の効と云ふもの……中々手際今一服を立てゝくりやれ（清）御褒にあづかり御恥かしう厶ります」と又茶を出すを先太郎は飲んで茶椀を下に置き清子を見てぢッと思入れ合方になり（先）光陰は白駒の隙をすぐる如く夫婦の縁を結でより早一年に近かづけど只一日も諸共に安き心は更になく漸々苦心の効有ッて徒党の人數の集るも女子に似げなく甲斐〳〵しく我を助くる和女の貞操並み〳〵ならぬ信切の禮は言葉に盡くされずかくまで恩ある女房に報ゆる事は更に無く夫れのみならず我が爲めに朝鮮國に渡り其上尋常手段のならずして干戈を動す塲合となれば知らぬ他國に夫婦とも骨を暴すも圖られず（清）エー勿体ない其の御言葉貴方の爲めには命はおろかどんな苦しい難儀でも妾は少しも厭ひませぬ生れ故郷や父母の國をはなれて幾里か波路遥けき異國の野末の露と消るともあの世の旅は二人連（先）彼の佛説にも夫婦は二世（清）蓮の臺の契りより後の世までめ芳しき美名を殘すが妾の樂み（先）ソリヤさほどまで殊勝な決心（清）これと申すも皇國の爲め（先）自由の爲めとは云ひながら思へば果敢なき」ト両人顔見合せ（先、清）身の上ぢやなあ」ト先太郎

は清子の手を握り宜しく仕打清子はうれしき仕打色合の様な摸様宜しく唄一パイにきれる此時ばた〳〵になり向より前幕の正作破れたる半天もゝ引き車夫にて逃げ來るを後より淺井法三、半出律助散髪かつら袴をはき何れも書生にて逐ひかけ出で花道にて正作を捕へ（半）一体手前は何者だ（律）先生の家とは知らず逐ひ〳〵寒さに向ふ故此奴盗みに來やがつたな（正）いゑ〳〵そんな怪しの者ではあり升せぬちと奥様に用が有り御庭内をも顧みず忍び入つたは私のあやまり（律）えゝ面倒くせい何をぬかす」ト二人にて散々にくらはし（律）淺井君こいつは竊盗未遂犯だ（法）イヤ晝間故なく人家に入つた犯罪だ（律）其の判決はあとにして先つ先生に公訴を起し（法）豫審調べの警察に引渡すのが僕等の役目（律）ドリヤ引致を致さうか」ト手暴く両人は正作を引き立る先太郎は之を見て聲を掛け（先）コレ〳〵手暴いとをするな（清）見れば年寄らしい様子」ト清子は下におり折戸の前に來り」コレ皆さん手荒ひとを遊しますな」ト此の聲に正作は思はず顔を揚げ（正）ヤヽ御前様だ〳〵（清）まことにこなた」トビックリ仕打（正）いつぞや上野で」ト云ふを押へて（清）あこれめつたなとは（正）イヤ〳〵言はずに居ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れチー」先太郎は合點のゆかぬ仕打にて(先)和女はどうやら見知りの樣子(淸)エートギツクリ仕打(先)奥にて暫時休息すれば和女はよく〳〵說諭を加へ早く歸してやるがよい」と思入あつて先太郎は瓦燈口に這入る(淸)さあ〳〵皆さん御玄關に御出なされませ(法)夫れでも怪しい此の車夫は(淸)はてまあ御任かしなされと云ふに」どきつと云ふこれにて兩人は是非なく捨臺詞にて下手に這入る淸子は前後を見回しはつと思入有つて二重に來り正作を招く正作は薄氣味惡き仕打にて漸々椽に腰を掛け(正)エーこなたはなあ〳〵」と合ひ方になり外面は柔しき姿でも心は鬼か畜生か忘れもしない四月の十日宵から降出す大雨に往來の斷へた御廟前私の歸りを待ち伏せて脾腹を突いて其のひまに御主人樣の言付けで受取つて來た大金をよくもこなたは取らしやつたなあサ夫れから私は途方にくれ身を投げやうとする所御巡査樣に止められ入らぬ命は助かれど何面目に歸られやう遂に家へは歸らずにどうにか取られた金だけは身を粉にしても稼ぎため御主人樣に返さうと六十ましした瘠せうでに朝から晩まであくせくと車は引けど此の節は若い人さへろく〳〵に錢の取れない不景氣故辻へ出れども乘客はなくあぶれて歸るばかり故車の端代に責められて粥もすゝれず貧乏にてこんな苦しい難儀を爲るもみんなこなたの爲せるわざかゝる惡事を爲し乍らまた御召捕にならないは天道樣もそでないと言つた所が仕方なくいつかは怨を晴さんと尋ね廻ツた今日がいまこゝの家から大勢の客の歸るを當込みに車を引て來た處玄關先にこなたの姿やれうれしやと庭口より忍んて見れば矢ツ張こなた……これ盜賊殿ぬすんだ金を返さッしやい……エー悔しくッて〳〵口もきけねー」と手拭にて淚を拭ひながら言ふ淸子は始終下を向て實なき仕打(正)だまつて居るのは不承知かもう斯ふなつたら仕方がねい御所刑受るがこなたの爲め……さあ私と一所に來さつしやい」と立ちかゝり色々有つて淸子の袖を捕もるを淸子は拂ふ力あまつてたぢ〳〵と下によろけながら折戶につかまりきつと見得合方替つて正作は淸子の力に恐れるとあつて(正)今度は中々其の手に乘らぬ手向ひするか(淸)なにしに手向ひ致し舛ようこれには深い仔細のあると二三日內には金子を調のへ必ず御前に手渡せばどうぞ許るして下されませ(正)いや〳〵ならねー盜人たけ〳〵しいとはこなたのと……エ……モー此の上は」ト裸をぬぎ二重に上り淸子

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

を引立てやうとする此の立廻の中奥より以前の芳雄出て來り正作を二重より突き落し(芳)正作立ち騷いて不禮なるぞ(正)正作なぞと一体こなたは(芳)秋田の下男……僕は立川芳雄なるぞ(正)そんならこなたは神田の若樣……はは…トへた〳〵トなりすお〳〵肩を入れて平伏す(芳)こりや正作証據もなきに盗賊呼り外の方とは違ふぞや必ず粗相を致すまい」と何にも言ふなと色々目で知らせる(芳)夫れとも証據の有ッてのとか法律家にて有名の花垣氏の細君がなんで左樣なとわらん迯へす〳〵も無禮ものめ(正)夫れでも確かな(芳)はてさて未だ〳〵申すか(正)へいー」と掘へる(芳)いや清子殿これは僕と一方ならぬ關係ある秋田富三の家來にて正作と云へる田舍漢何にかのとの間違ひより當家に亂入せしのみか御身に對して不禮の段々何卒僕に免じられ許してやつて下されまし」と宜しくある清子はうつむいて居る(芳)正作其筈には用事もあれば僕と一所にまいれ(正)夫れおやと申して(芳)はてさてまいれと云ふ」に(正)へー」と扣へる(芳)清子殿暫時御免下されさゝ御庭傳に一所にまいれ」と清子に挨拶をして芳雄は正作をつれて上手にゆき正作にさゝやくとある正作は上手に這入る芳雄は思入あつて

石燈籠の影に忍ぶ此の時瓦燈口より樣子を窺ふ先太郎出て來り(先)清子今より離別致たれは何れへなりと勝手に行きやれ」清子ははゝ……」と泣き落す(先)こりやよく承れ彼の企を爲せしより少壯血氣の若者が粗暴過激のとなきやう今が今とて木曾川始め南條木戸にもくれ〳〵と正義の重きを說諭せし此の先太郎の女房が人の財を掠奪ゑかくまで難儀を掛るとは云はう樣なき不所存者其の方一人の心より徒黨の人には云ふもさら世間の人に此の方がなんと面を合されやう我れのみならず吾黨の名譽をよくも汚し居ッたな思へば〳〵大望の名義を傷く惡ッくき女……夫婦の緣も今日かぎりトッットと出てうせ居らぬか」ト腹立の仕打(清)サ、其の御腹立は御最も隱して詮なき一通り御聞きなされて下さりませ」トしんみりとした合方になり(清)爆烈彈の入費の爲めのつぴきならぬ大枚の金子の爲めに色々と貴方の御苦勞遊すを十分の一なり御補けを致さんものと所々方々才角なせど調はすさりとて一夜に迫りたる大事の際のとなれば如何はせんと色々に根岸に歸る途すから思案に空も暮れ合ひより降り來る大雨の其中を彼の老人の大金を持ッて居たのか互いの因果今宵に詰まる難義故どーぞ貸してと顋

めども主人の物故貸されぬと斷るのみか盜賊と呼び叫ばれてひつくりゝ爭ふはづみに過ッて脾腹を突けば其の儘に悶絶するに驚いて介保なさんと思ひしに雨風烈しき御廟前女子の心の淺はかにもフット浮んだ不道心妾の命一ッにて貴方の御爲めになるとと覺悟をきめて大但にも盜み取ッたる金子をば貴方の御用に立てゝより今日は死なふか明日はまた身を投げやうと覺悟を極めて居り舛す中今見る如き有様になに面目に長らへん貴方を始め大望の名義を汚した御詫にはさうぢや」と机の上にある小刀を取り自害せんとす此の時芳雄は二重に上り淸子を留め(芳)まりや淸子殿血迷ひ玉ふか」と小刀をもぎ取り御身の日頃の行に似合しからぬ粗忽の振舞とるに足らさる車夫輩の申するとが信せらるべき彼の正作は愚直にて一途に思ひつめたる故前後の差別更にあく人違ひとは知らずして御身に對して不禮の段々今は後悔詮方なく僕に御詫をして呉れと涙を流して彼れの頼み此の趣きを申さんと只今來るに此の有様……まだ御疑念は晴れませぬか」まれにて淸子は餘義なく扣へる(芳)いや花垣君必ず〳〵正作の申せしとは過りにて彼は貴君にその様な責怒を受けんと恐れ居ればぞうぞ彼れ等は無智の輩年に

免じて御許し下され御令閨もなんで死ぬべきとやある笑止至極な間違ひで厶る」と色々ある先太郎は芳雄の義心を感ずる思入あッて(先)實に不意なる間違となすも貴君の(芳)エー(先)イヤ貴君の爲めに間違の事實もまあとに明かなれば言はず語らず此の塲はこれぎり(淸)ソリヤ御許るし下さりますか(芳)永々變らぬ御夫婦中(先)あれと云ふのも貴方の御情け(芳」イヤ〳〵貴女の潔白故」と上手に向ひ「正作〳〵」ト呼ふこれにて正作恐る〳〵出て來り平伏す(正)へイ皆々様ついした人違故とんだとを致し升して已に奥様は御自害なさる所アー昔なら御手討にもなる大罪命の助かるは開化の御代は難有いものでムり升もし奥様惡ィ爺ト思召さうが且那様にも仰しやつて御免なされて下されませ」ト色々詫る(芳)其の方の過は御詫び申したら御許し故難有御禮を申し上げ僕と一所に秋田の別莊にまいれ(正)且那様奥様異事に難有く存します」芳雄は兩人に向ひ(芳)明日密々御目に掛りますれば今より御暇をいたします」ト會釋して芳雄は正作をつれて向へ行きかゝる先太郎は正作を呼びとめ(先)これは些少ながらほんの印しぢや」ト十圓札を包みやる(正)もし若様(芳)切角の御思召故(正)さ様なら戴き升

す」と禮を述べ二人は向へ這入るわと先太郎は見送て感心の思入れ（淸）此の身にかゝる罪尤も淸き流れの立川の水に洗らつてさつぱつりト」（先）條理を立てゝの計らひは學才と云ひ義心と云ひ天晴れ得難きよー」ト思はず椽に腰を掛るを木の頭」壯士ちやナー」ト此の摸樣宜しく時の鐘にて拍子幕。

御愛顧の令孃方に一寸申します前號に「强盜竊盜」云々ト「强盜賊」の間違です三幕目は結局にして塲割は三つにて「粹」で「凄」く「勇」しー處で當狂言の大詰め〳〵

流行

流行見本插畫の解

第一　テエブル掛ぬひとり摸樣

心の葉の色は萌黄、中の粒は黃、葉の筋及び粒のへり、及び葉のへりはいづれも橄欖色。花は眞紅、紫のへり取、黃の心。葉は乱藻形、色は萌黃。縫取地は靑色の天鵞絨あるひは繻子。　テエブル掛の大小により、中の摸樣を加減しますが、しかしテエブル掛の椽は眞紅又は橄欖の一色に限ります。

第二　掛け針さし

是は壁に掛ける針さしです。臺切は赤天鵞絨、中のぬひとりは靑に白茶の緣を取ッたもの、流蘇及び紐は悉く紫（或は靑）

第三　瀧のぼり鯉の根掛

瀧の水は白絹、鯉は絹の縫ひぐるみ、玉の目。根掛の中でも實に妙趣向です

小柳の帶の色合

一寸流行してゐるのは主に蝦茶、及び御納戶。

厚板の帶

すゐし厚板の帶がちらほら見えて來ました。　しかし大した勢でもありません。

雜纂

ばびろんの奇風

太古の西洋歷史を讀んだ方には御存してしやう、むかし埃及の近處にばびろんと言つて一時はよほど盛な國か有りまし

た。元よりまた未開であつた世とて仕方もありませんが、あのばびろんにはその頃極めて惡むべき、嫌ふべき、またあはれむべき事が行はれました。即ち紀元前五百年頃の時代には婦人の賣買が有つたのです

どうして賣買したかと言ふに、毎年一度せり賣りの市が立つて、そこで未婚の婦人の賣買がはじまるのです。あれはあらかじめその日が廣告に出て、さてその日になると皆その婦人たちは化粧に化粧を凝らして道具か何かのやうに陳列されます。あらたに妻を得やうと望むものは此の日をあてこみ、多少の金子を用意して買ひ取りに來ます。陳列の少女の中には美人もあり、また醜婦もある、その美人も醜婦も價の高低のあるばかり、勝手次第に買ひ取られます。美人だけ價は高く、醜婦だけ値は低く、買手はいづれも袋を傾けます。諺に「うれのこり」といふとほり、かう市が立つて居る内に早く無くなるのは美人で、後まで殘るのは醜婦です。醜婦が殘ると賣買の監督をするものが仕舞物とて安價で賣り出します。さうかうして居る内にはいつか大抵その醜婦も賣れて行きます。中には富んだ男はまづ美人を買ッて後、さらにその侍女にでも爲る氣ですあし値のやすいのをも買ひます。

このとほりにして買ひ取られればその人の如何に關せず、その人の處におもむいてその妻――むしろ奴隷――となるより外仕方はありません。それもあに國風とあきらめながらさすがに猶しのびかねて悲しみなげくものが多いです。

しかしあの風習はもはや今日には斷えて居るのです。が、今日の日本にこれと似た事が有りますか、有りますまいか。書き終ッても人事とは思はれません。

淑女結婚の心得

一、男の外面のみを見て婚禮せぬこと。

二、良い夫を持つたのも良い妻を持つたのと同じく無上の幸福と信ずること。

三、結婚を急がぬこと。

四、夫や子を見事に資け上げる氣で結婚する事。

五、親族縁者の涙のために我身を金錢に易へぬやう志すこと。

六、金錢で買へぬ德を深くたくはへるのに心掛けること。

四、男子に逢ふたびに己が撰む目の眞僞を虚心で考へること。

八、男子の容顔、才力、豪富などは我に何でも無いとまづ志して置いて後えらむこと。

九、才力よりはむしろ眞面目な人をえらむこと。

女子の敎育

文學博士加藤弘之君がさきに演說されし敎育の心得といへるものゝ中につき諸孃のお心得となるべきことを摘みとり左に掲げて御覽に入れます

（上畧）西洋が宜しいと云へば何もかも西洋が宜しい踊が好いと云へば踊を知らなければ西洋人と交際することが出來ない是からは踊を知るが第一であると云ふ風である踊も宜しいものである交際をするにも宜しい體の運動にも宜しい宜しいとは澤山ありますが一ッ女の心を支配する宗敎と云ふ大切なものがない故に人の心が落付かず唯々うか〳〵として居ます其れでありますから或は踊をすると云へば唯踊が面白く或は其れが盛になつて來ると悪い風俗が起つて來ると云ふとがあらうと思ひます西洋でも隨分踊の爲に悪い風俗が起つて來る唯西洋流になると踊は第一大切なものであると云つて家の両親の機嫌を取ることを止めても踊に行かなければあらんと云ふ様になつて來る日本流の家事の方はしないが宜しいと云ふ様な弊害が起らうと思ふ只西洋の事が善と云つても日本の人がソウ西洋通りになれると云ふとはない日本人の住つて居る家を悉く西洋館にすることも出來ん又食物を悉く西洋風にすることも出來ません其れも金があつたら出來るかも知れませんが日本人の氣性を悉く西洋人の氣性通りにしたいと云ふとは決して出來ない其れが出來ないときには若い娘が學校へ入つて西洋の娘の通りに敎育を受けても仕方がない西洋通りになつても仕様がない家の役には少しも立たない然う云ふ風に敎育されたときには家に歸つて見ても両親と氣が合んから話もせん然うすると両親の云ふとを聞くも嫌になると云ふのは當然であるさうすると不和を生じて親子の中も悪くなる然う云ふ様な弊害が澤山起らうと思ふ（下畧）女新聞第四十一號

寄書

いらつめ方への御忠告

大坂　琴水　識

先達而のいらつめに女學校の近傍に男の下宿屋のある事は

書てありました。　まことに妙な御話しです。　しかし其にあまり關係の有る話ではなきも當大坂には實に不道德な人間が居ります。　どんな物ですか、それはあの名高き傳授屋です。　新聞にはいかめしく廣告して何々協會とか、何々共同所とか、そして實地にそんな物は一軒もない。　わたくしも此頃當地東邊のある町にてりつぱに記臆法とか、復寫法とか何とか角とかの廣告によつて御傳授所をさがしました。　知れません、知れません。　やう〱〱終に知れた所はもツとも小さき裏屋の隅。そして御主人はかならず御不在。　いろ〱尋ぬれば、「傳授のぞみなら金子を」と云ひます。　嘗て京都の人がわざ〱當地へ來て例の家をさがしても右のとほりと聞きました。　そして近日朋友とわたくしと實行して結果は同じ。　皆さま氣を御附けあそばせ。　幸ひにはいらつめに通信問答が有ります。　是程結構な物は又とない。　其何でも一先いらつめに問ひ、答へを待ッてその上の事。　當地の傳授者は昨今の流行。そして場所は皆東區邊です。

琴水女史に謝す　　如電居士

都の花に載せたる居士が小説無花果艸紙に大坂言葉の誤りあることを縷々懇々と忠もて告げられ其志しの厚き其情の切なる實に千萬無量といふべしかゝる無用の戯著にいとも貴き時日を費させらるゝ丁寧親切たゞ〱ありがたしと申さんより外に述ぶべき謝詞とてはなしさてこれ迄居士が小説を艸する意は左の如し

小説は元來空中樓閣なりされば主義なきを主義とすべきに苟も主義ありて筆とらば寓言とや申さん託言とや云はん居士が謂ゆる小説にはあらずこの一篇の小説は即ち無主義を主義としてありさうなさゝうな事實を無理におちつけ素より世道人心に益あるにあらず又益する心もなし只々變化の妙を示さんとものせしなれば噓から出たる眞事と思さんも本道らしき虛言と見なされんも讀者のまに〱居士は一向頓着せず

こは此ころ艸したる其小説の例言なりいま女史の忠告に服し爾後は倦餘一戯たりとも等閑にすべきにあらじと悟りたりさりながら居士は筆とるわざもて世渡りすとも小説は曰はゞ怠屈しのぎさほど窮屈なる理屈ありとも心付かず今更わが身の偏屈なりしに呆れはてぬ

さて女史の御壽命は人類普通年齡を倘三十五六年も餘さるる

〻よし前途悠々可レ賀可レ羨居士は本年四十五才やつと天保人間を免れたる半老人といふべし決して跡追かけて慥かにこの道オヽ　そうちやと尋ね申さん氣力なしされば逃くとか隠るとかのみ心づかひはあたおそにおそ穴賢

餘興

新作謎
五月七日〆切り
懸賞
皆答の方には新著百種の内一冊及びいらつめ新板二冊
五お答の方にはいらつめ一冊進上

（一）　出題者　くろんばう

低い處にあッてそして日本で一番たかいものはなに。

（二）　同　同

華族様の中でどなたが一番大きな帽子をおかぶりなさるか

（三）　同　同

世たい道具を何處に行くにも脊負て行く人はだれ。

（四）　同　同

此頃芝居を見に行た處が幕あひが長いものだからしまいの幕は〇〇〇〇〇〇〇ド〇〇〇〇。（幽四ッ）。

（五）　同　岩手　櫻井きつ子

身共は人間にあらされどもまその外衆に愛され我名は外國まで轟けりして身共の腹を抜けば食器となり足を断れば家のかまひとなり首を切れば馬具となり足を切て倒にすれば馬の食となる

（六）　同　京都　藤田清女

私は肩をいからして居て随分とも御役に立つ者と自分ながら思てゐるにおなさけない皆様のいふおそにや彼はキぬけがしてゐるから用にはならぬとサ

今度の謎は易いでしやう。　前号のおうめ合せです。

第廿一號餘興新謎の解

（一）巻煙草の先の灰　（二）大　（三）ボン〳〵時計のサゲ振　（四）鵜鷺　（五）燈をけせばけすほどヤミはふゑます　（六）人のからだ　（七）（まのしろ）に（いるか）（いな）（いか）（はや）（あひ）（たい）

皆當者はありません。　六つあてたるは藤田さんと渡邊さん廿一號の謎は皆さん御見限とみねますが今度は澤山願ひます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

春雨遊

(い)舞た〳〵

皆さんあんなに雨が降て仕方が厶いませんから舞た〳〵でもしやうでは厶いませんか。サアーしましよう。けれど妾達は知らないワ。ナニわけはありません。かうするんですよ。まづ子鬼を一人きめて其鬼が「鳩が舞た鴉が舞た鳶が舞た」と袖で羽たゝきをしながら云ふのですよ。サウすると外の鬼でない者も鳩や鳶の様にホントニ舞ふものを鬼が云へば同じ様に羽たゝきをしますの。けれど若し兎や犬の様に舞はないものなら羽たゝきをせずに居るのです。若し間違ッて羽たゝきをすれば其人が鬼になるとか藝盡しをするとかするのです。わかりましたか。アーよくわかりましたよ。ソンならサー一度して見ましやう。妾が鬼になりますよ。アラ笑てばかしゐてはいけませんよ手を袖の内へ入れて羽たゝきの仕度をなさいな。サアようございますか。

鬼「鳩が舞た蝶々が舞た鳶が舞た犬が舞た」

「アラお春さん犬は舞ひはしまんよ、サア貴嬢が鬼」

春「犬が舞た兎が舞た鷲が舞た」と羽たゝきをせずに云ふ

「ウフ〳〵鷲は舞ますよ。サア御桃さん貴嬢が鬼」

右の遊は鬼は羽たゝきをすべきときにしやうとしまいと勝手で厶います。

(ろ)鼻〳〵

前のと大概同じでそして皆様よく御存知ので厶いますが序ですから書きますが両人差向でにらみ合てゐてする遊です。人指ゆびを両人とも鼻の上に置きお甲さんが鼻〳〵〳〵〳〵と云ひながら指を鼻尖につけたり離したりしてゐて不意に口とか耳とか云て指を額や眉や目や頬や顋に持て行くのです。其時お乙さんが口と云はれたら口耳と云はれたら耳に指を持て行けばよいのですが若しお甲さんの指の動き方にだまされて口と云はれたのを顋に持て行たりすればお乙さんのまけで鼻〳〵を云ふ人になるのです。

お甲「鼻〳〵〳〵口」と云て指を目に持て行く。

「アラお乙さん妾のまねをして目に持て行てはいけません口ですよ」オヽ、サウー〳〵。「サア妾が鼻〳〵を云ひますよ」

お乙「鼻〳〵〳〵鼻」と云て口え指を持て行く。

「ウフヽ、アハヽヽヽ、貴嬢も矢張妾が鼻と云たのに妾の真似をして口へ持て行てサ。

甲乙「オホヽヽヽヽアハヽヽヽヽ

通信問答

通信問答欄で一々またへる處には題をも併せて書くやうにとの御忠告もありましたが、いかにも塲處を成るたけ節倹するため、さうも出來ません。しかし出來るだけは他の人もたゞ讀んで御分かりなさるやうに書きます。只秘密にしなければならぬ類の事は漠然と書

く、それだけは御容赦を願ひます。

山尾民子さまへ　(一)毛生藥は東京資生堂の養生書なども有効の方です。(二)日に燒けるのを防ぎ、また燒けたのを治すにはレモン液で洗ふに限ります。レモン製の石鹼で洗ッても好いですが、簡容なのは藥舗からレモン液を買ッて洗ふ方です。やはり手の掌にすこし受け、それでよく〳〵肌を洗ひ、その後を淸水で洗ひ落すのです。(三)いらつめ第十七號色の黑い肌を治す法にある赤土は普通にいふ赤土です。萬年靑などに適するものが尤もよろしいのです。(四)レモン入りの石鹼は横濱の西洋小間物商會(外人の)で賣ります。が、價は安くありません。　御手數を省くには第二の條にあるとほりレモン液で間にあひます。(五)生れつき黑い肌を治す最上の法は砒石を飮むのです。しかし、開業醫に是非とも指揮を受けなければありません。(六)鼻がつまるのを治すのに是ぞと思はれる法は無いやうです。(七)鬢附は東京日本橋區の柳屋の柳淸香などがまづ上等の方です。梳油も同前。京ばし區尾張町白牡丹のもわるくは有りません。　白粉は鉛分の少なく、アルコー分の薄い處で言へば神田區南神保町の翁屋製造に係る水白粉(花の雪)が最上です。　白粉下も同店の花の雪か肌のため尤も有効です。(八)初學に適當な假名づかひ獨修書は日本橋區中央堂の發兌、物集高見氏の著、假名づかひ敎科書か、または古言梯などです。　假名づかひ敎科書はたしか十五錢ぐらゐでした。　また古言梯は和書を賣る書肆には大抵有ッて、十五錢ぐらゐです。(九)日本語字引でまづ完全なのは是からやがて出版になる大槻文彦氏の言海です。日本橋區の書肆小林新兵衛でも是は賣ります、定價は豫約代價で全部四圓。　また日本橋區本町の瑞穗屋出版物集高見氏の日本大辭典、これもいゝ方です。　定價は七圓。(十)家政學で今是ぞと思はれるのは金港堂出版の家政讀本か、または女學雜誌社出版の姬かゞみです。(十一)子供養育法の書物は金港堂出版の家庭敎育、及び子供のをしへ方などです。(十二)西洋料理法及び婦女衛生の好ましいのはまだ有りません。

後藤岩孃へ　縮れ髮を治すには麻の葉、桑の葉、この二つを等分に煎じて、それで常に髮を洗ひ、そしてよく梳るのです。

阿久津令孃へ　(一)散步は食後三十分ほど過ぎての後が尤もよろしく、不潔な物の無い以上は何處を散步しても宜しいです。(二)齒痛にはケレオソート(藥名)が一番よろしいです。是は藥屋にあります。　成るべくは醫者から之をば御買ひなさい。　齒痛に頰が腫れるのは齒痛が去らなければ治りません。

錦浦高垣子さまへ　(一)金銀器へ書いた字を更に消す法は存しません。(二)火藥は硝石、木炭、及び硫黃の混合物です。(三)善良の滅金は器械が無ければ素人には出來ません。

吉田篤子さまへ　(一)記臆をよくする法を敎へる西牟田氏の宿所は薩广國椙宿病院でわかります。(二)月經の終つた後三四日の間は懷姙し易い時です。　その後月經になるまでの間は懷姙しやすくない間です。(三)眞菰の灰は無論藥屋に有りません、これは手製にするのです。(四)簿記學を脩めるに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は堀内正善氏の普通簿記學（博聞社出版）、及び藤尾條郎氏の家計簿記學（經濟雑誌社出版）、などが宜しいです。

上田某女史へ　手輕な染物法は十分に探り次第その内に續けいらつめに出します。（二）鉄物の鉄氣を去るには漆の新葉をその器へ入れ、廿四時間ほど煎じるのです。（三）御たづねの趣がわかりません。御再問を願ひます。（四）前の吉田篤子さまへの答への（一）を御覽なさい。

小邊賤女さまへ　（一）痘跡を去る法は知りません。（二）白禿を去るのも知りません。

九條ホ子さまへ　肉色を薄紅にするのに第一行ふべき手段は色を白くする事です。色が白くなつた上では可成肉食をし、また脂肪質の物を常に用ゐ、また温浴よりは冷水浴を行ひ、そして下等の石鹸を用ゐぬやう此心掛が一番です。石鹸にも色々有りますが、舶來の廿錢以上の化粧石鹸が好ましいものです。是で運動をよくし、また次の新橋の賓子孃へ答へた化粧水などもちゐて居れば結果は大抵容易にあらはれます。しかし、その間も注意すべきは胃弱と肺病とを避けるおとです。また撒兒少根は絶居にあります。

新橋の賓子孃へ　なまぬるい湯に稀く硼砂を解かし、それで毎朝顔をあらふのが色を白くし、肌をなめらかにする第一の法です。その外に前と同様な能のある化粧水製法は左のとほりです。即ち、硼酸三匁、リスリン十匁、及び橙花水六十匁、あの三色であはせた水です。あれを日に二度ぐらゐ宛顔へ塗るのです。洗ひ落すに及びません。

松田梅子さまへ　（一）稀い茶は胃に大した害をしませんが濃い茶は害をします（紅茶は例外）。（二）烟草は吸はぬ方がよいです。（三）切口からの出血を止めるには定齋（藥の名）の粉を切口にふりかけるのが一番です。（四）歯磨の良否を知るには通例手ざはりでしますが、素人にはその熟練が中々得られません。

大穀非川四四さまへ　ザラ〳〵せず火の中でもえるのがよいです。氣のつかぬ内にいつか髮が禿げた原因は記者には分かり兼ます。因て直す法も、御氣の毒のいたりですが、存じません。

咲子さまへ　（一）御尋の趣は九條系子及び新橋の賓子二令孃への答へを御覽なさい。（二）頭の毛をうつくしくするには、よく梳るのを怠らず、そして洗ふにも硼砂を溶かした水で洗ふとです。（三）御尋の記憶法は多少効能があります。

東山ます子さまへ　（一）暑中の歩行に汗の出るのは成るべく止めぬ方がいゝのです。止めるのは汗おさへといふ物を藥屋で賣りますが、身体によくは有りません。（二）熱氣無く濕氣無い砂に等分あるひは三分の一ほど焼鹽を交ぜ、その中に肌を接せぬやうにして置けば藥物は大抵たくはへられるものです。（三）黒インキの製造は其の中に申上ます。

横山ひろ子さまへ　（一）衣類にインキの附いたのを落すには手早く新鮮な牛乳（人乳でもよし）をその處に塗り、しばらくして冷水であらひおとしても宜しいです。（二）肋骨を低くするには醫者に御托しなさる方が宜しいです。しかし、恰好な法は無いものです。

奈曾かつ子さまへ　（一）そばかすを去るには前の山尾良子さまへの答への（二）の法を御用ゐなさい。やがて成効はあ

ります。(二)まづ和文を修めるには八犬傳、昔人形、稻妻表紙などを御覧なさい。次には太平記、古今著聞集、神皇正統記、折たく柴、今昔物語などに移り、それから次第につれづれ草や枕の草紙や源氏へ御及ぼしなさい。てにをはを覺ゆるには中央堂出版物集高見氏のてにをは教科書が初學にはよろしいです。

田舎娘さまへ　(一)赤毛をば桐の葉を煎じた汁で常に洗ふと次第に黒くなるものです。(二)腫物の跡の禿には毛が生へません。

梅花女學校ABC令孃へ　(一)、(二)、(三)、いづれもこの欄内の前の方に出て居ますから御覧ください。

松田さけ子さまへ　記音術の最上の獨習書は調べがつき次第、郵便で御答へ申します。

懸賞文藝

第二回懸賞題　春の野あそび

和歌發句の分

右一等賞……坂井よし子(高知)

さとの　子が　わかな　つむ　とて　あそぶ　らむ、
のあらの　しみづ　うはにおり　せり。

右一等賞……堀田成美(駿河)

野あそびや　すみれ　つむのも　出來おころ。

右二等賞……中村てい子(信濃)

たびね　する　はるの　のべこそ　をかし　けれ、
かすみの　とばり、　くさの　たまくら。

右二等賞……中村ひさを

いとゆふの　のどかに　あそぶ　はるの　のに
うかれぬ　ひとも　あらじ　とぞおもふ。

文章の分

は記事澤山にて掲載することが出來ませんゆゑ次號まで御猶豫を願まして左に當撰された方のお名前だけしるします。

一等賞……靜觀山人と松木よし子さん

二等賞……江條龜次郎さん

右一等および二等賞を得た方々には御約束どほり第廿二號からのいらつめを一等は一年分、二等は半年分差あげます。一等賞及び二等賞を得ぬ方のも佳作は追而いらつめに出すつもりです。

第三回懸賞文藝新題

わかみどり　五月五日しめきり

笑顔　五月廿五日しめきり

作は和歌でも、唱歌でも、發句でも、またどのやうな文体の文でも。

但し狂体滑稽体は禁物。

原稿は半紙板の紙に楷書で、明らかに。

原稿にも宿所姓名を正しく、

そして二十七字詰に記すべし。

●東京女學校設立廣告●

○吾人ガ女子敎育ノ切要ナ感ズルヨリ女學校ノ設立ナ企圖スル者日ニ月ニ多キナ加ヘ想ニ已ニ其設立ノ目的ナ達シタル者恐クハ數百ニ降ラザル可シ然レ𪜈吾人ガ望ム所ハ其設立ニ非ズシテ女子敎育ノ一点ニアレバ假令學校ノ數ハ登テ數萬ノ多キニ至ルモ未ダ以テ吾人ナ滿足セシムルニ足ラザル也而テ今ヤ眼ヲ放テ都下既設ノ女學校ヲ觀察スルニ其敎育法或ハ高尙ニ偏セザレバ或ハ粗雜ニ流レ其高尙ニ偏スル者ハ數多ノ年月ト巨額ノ學資ナ費サヽルナ得ズ其粗雜ニ流ルヽ者ニ至テハ年月費用ノ点ニ於テ大ニ前者ニ勝ル所アリト雖其効果ノ不良ナル蓋識者ナ待テ後知ラザル也是吾人ガ既設數百ノ女學校アルニ關ラズ新ニ玆ニ本校ナ開設シ優良淑雅ノ女子ナ敎育セントス欲スル所以ナリ吾人既設女學校ノ弊害ノ有ル處ヲ知ル豈敢テ其轍ニ倣ハンヤ本校設立ノ目的ハ善ク年月ト費用トナ參酌シ高尙ニ偏セズ粗雜ニ流レス世間多數ノ婦女ナ敎育スルニ在リ請フ江湖ノ同胞姉妹ヨ笈ナ負テ來學セヨ

○但去ル十日開校各級ヘ入學ナ許ス望ノ諸君ハ速ニ申込アルベシ

敎科課目は英學和漢數學手藝等苟くも女子に有益なる學藝技術は之を敎授す課目並に規則の詳細は二錢郵便切手御送附あらば一本を呈すべし修學年限は四年。又正科別科の區別あり。

神田猿樂町
十三番地

私立　東京女學校

●社告

次號に別刷にし**附錄**は織田信長公より後に北の政所と呼ばれたる木下藤吉郎の妻女へ送られたる手紙を其儘摸寫したるものにて隨分珍績なるのみならず其文意もまた妻女の心得ともなるへきと多ければ旁御一讀を願ひます

寄書等すべていらつめへ掲載する物の御草稿は廿七字詰にお認めくださいまし。一々字數を數える小僧の骨折も少しはお察しください

月報

●高等女學校及女子職業學校へ行啓の御摸樣　兼て仰出されたる如く　皇后陛下には昨日午前九時御出門園典侍御陪乘柳原權典侍香川皇后宮太夫北白川宮三宮両夫人黑田總理大臣榎本文部大臣御夫婦供奉にて一つ橋外の高等女學校へ行啓あらせられ矢田部校長の御先導にて設けの御休息所へ成らせられ暫時御休憩の后各敎場に於て四年生英語（メリープリンス氏受持）二年生甲地理（長谷川方文氏同）二年生乙英語（鳩山春子

同)三年生植物(染谷德五郎氏同)四年生唱歌)上眞行辻則承氏)三年生裁縫手藝(イサベラ、プリンス竹内豊田村孝子同)級外生圖畫(武村千佐子同)一年生甲、國語(平田際胤氏同)一年生乙、數學(木下邦昌氏同)博物標本陳列室(染谷德五郎氏同)甲組体操(坪井玄道氏同)の課業を御覽あり畢ッて午餐を召させられ午后講堂へ臨御ありて二年生の洋琴聯彈一年生渡邊あい子の邦語談話(蛙と鼠)級外生のヴァイオリン四年生の邦語作文(筆の力は刀より鋭し)生徒十二名の英語唱歌二年生の邦語暗述(姉と妹の心掛)生徒一同の邦語唱歌(惠の露)撰科生の英語暗讀三年四年生の洋琴等を御覽あり了りて隣地なる私立女子職業學校へ行啓あらせられ先つ校長始め各科教師に拜謁を仰せ付られ香川皇后宮太夫を以て同校へ御土産として金貳百圓下賜わり夫々校長の御先導にて各教場を御巡覽造花科室にて玉歩を止させられ親しく生徒の製作中なる牡丹花に御手を觸れさせ賜ひ此花は絹切何尺を要し如何なる處より鋏を入るゝや又花は實に本物の如く妙なりと御褒詞等有りて陳列室に成らせられお買ひ上げに成りしは花鳥摸樣の陶器大皿八枚生徒内藤かお、那須まん、神たき三名の畫の造り花一鉢一年生小關熊の中小の造り花籠二個鈴木鶴、小澤のぶ、田口よし等製作の海棠一鉢堀口ふくの畫の下一鉢石川みゆの製作 花簪三十本等にて又校主よりハ生徒伊藤榮、岡本みつ、山本とい等の製出に係る大花籠、櫻、牡丹、椿、等の造り花を獻上し御機嫌麗はしく還啓在らせられしとぞ

●女王列次　皇室典範御治定ありたるに際し、皇族方の列次を定められたるに付、女王方列次をも左の如く定められたるよし。

伏見宗諄女王。	伏見文秀女王。	久邇宮女王。
榮子女王。	安喜女王。	飛呂子女王。
晴子女王。	素子女王。	篤子女王。
純子女王。		

●叙勳　故邦家親王妃景子故博經親王妃郁子の御兩方には去月二十五日勳一等に叙し寳冠章を賜はりたり

●文部大臣　大山巖氏は先月廿二日を以て兼臨時文部大臣を免せられ逓信大臣たりし榎本武揚氏は其の日を以て文部大臣に轉任せられたり。　明治四年七月文部省設置以來長官の更迭就職及在職の年月を擧ぐれば左の如し但し田中不二麿氏は大亟若くは大輔を以て省務を攝行せられたり。

長官　就職年月　在職年數

大木喬任君	明治四年七月	一年十月
田中不二麿君	仝六年四月	九月
木戸孝允君	仝七年一月	六月
田中不二麿君	仝七年七月	三年十月
西郷従道君	仝十一年五月	七月
田中不二麿君	仝十一年十二月	九月
寺島宗則君	仝十二年九月	五月
河野敏鎌君	仝十三年二月	一年一月
福岡孝悌君	仝十四年四月	二年八月
大木喬任君	仝十六年十二月	二年
森有禮君	仝十八年十二月	三年三月
大山巖君	仝二十二年二月	

●華族女學校幹事　華族女學校幹事色川國士氏は前に文部書記官に榮轉せられしが此程同氏は更に華族女學校教授を兼任せられ本郷區長北澤正誠氏は同校幹事を命ぜられたり

●赤坂區慈善會の賞盃　同區にては去る明治十六年中區内赤貧救助の爲め慈善會なるものを設立されたる以來一期内即ち五ヶ年間に施療濟貧したる合計は患者百十人にして此の施療日數六千四百八十六日と貧困者十三人に救助したるは白米一

石八斗四舛金二圓五十錢毛布二枚綿入一枚にして有志慈善者より寄贈の金額は千七拾貳圓八十七錢五厘なるを穗積同區長は豫て其筋へ上申せられし處去月六日東京府を經て賞勳局より銀盃一個及び賞狀を同會へ下賜せられたり

●東京府養育院慈善會　同會は一昨日より本日迄三日間上野公園華族會館に於て開會されたるが右委員長は銀林書記官委員は與倉庶務課長外六七名なりしと云ふ

●女官の寄贈金　右東京府養育院慈善會は去る二日皇后宮御附の女官方より金五拾圓寄贈せられたり

●横濱婦人慈善會　今度横濱梅が枝町一丁目の田村とげ子が發起にて廣く仝港の貧民を救濟せんがため婦人慈善會を開く由にて目下其準備中なりと云ふ

●京都婦人慈善會　京都婦人慈善會は去る二日京都府立盲啞院に於いて開會し來賓諸氏の演説等ありて頗る盛會なりし由

●伏見婦人慈善會　山城伏見の有志者醫師嶋田彌一郎僧侶阿滿得聞氏等數十名の尽力にて婦人慈善會を組織し去三月廿六日伏見大坂町本願寺別院に於て第一回を開會し渥美契縁、阿滿、嶋田、青山其他諸氏の祝辭演説等ありて演説の間には同地高等小學校女生徒廿餘名唱歌を奏したり本日の來會者は三

百廿餘人にして伏見未曾有の盛會なりなし

●私立訓盲學校　京橋區日吉町四番地に設立の私立訓盲學校は今度教育上一層進歩完全ならしめんが爲め良教師を贈聘し諸科目を改良し目下頻りに生徒を募集する由なるが校則に基き從前の通り無月謝無束脩なりといふ

●宮城看護婦人會　宮城縣會議事堂に於て同會を開かれしか會員百五六十名にて繃帶使用眼病用帶繃等の實習あり次に講師戸塚軍醫生は病者睡眠及其介補、發汗介補、咳嗽介補等の事を講え中泉軍醫生は傳染病總論概畧附麻疹病狀を講せられたり

●婦人財嚢　競爭の花は婦人財嚢なり。之を得るもの必らず悲しからざるへし、然れども婦人財嚢なきも競爭はあるべし。　婦人諸君よ一人若くは數人の笑顔を見給はんより慈善の目的に喜捨して天下の笑顔を見給ふては如何に御座候哉

御注意

天然痘がはやりますからお小供衆に種痘をなさい、麻疹とヂブテリヤもはやりますから御用心。

●婦人の醫者　婦人方の病氣を治すは婦人の醫者がよろしいと記者は再三申ましたが年を追て其數のましますのは眞に賀すべき事でムります。　さて既に開業しましたのは

萩野ぎん子（神田西黒門丁）　高橋みつ子（日本橋區）　生澤くの子（埼玉）　本多せん子（静岡縣）

此外前期試驗に及第した人が十三人あります

●成立學舍女子部　にては例年の如く本月一日盛なる卒業式を施行せられ弊社へも招待狀を送られましたが不幸にも差支がムりまして其席に列なるとが出來ませんでしたが新聞で承はれバ朝野の學者の祝辭卒業生の答辭奏樂等ありていとも盛會なりし由

●東京淑女館　は女教員のみで教授するよい學校だから淑女方に御來學あるやう吹聽してくれろと頼まれましたから其通りを申上ます

正　誤

第二十號藤梅子の懸賞文中（第三十五頁上段）「に問はまほしきは機」の數字脱し、同十六行「してよさは」の「は」は衍。

第廿一號孚水女史の無花果草紙批評のはじめ、「いつたでやアたん」は「たでやしたん」のあやまり。

いらつめ第廿一號にある唱歌「つゝましさハ」拙作ながら妾の手に成れるものなり。今いさゝか子細ありて取消さんとす。御序の節にこのよし掲げさせたまへ。

四月はじめ　孤芳女史

いらつめ記者さま

御もと

國乃とも

東京　興文社發兌

毎月一日發行●定價八錢郵税一錢●六部前金郵税共五十一錢●十二冊前金郵税共九十七錢

第一號刷高一万部再版五千部瀛關社印刷

四月一日……第一號發兌●●●祝詞○國の基の發刊を祝す文學博士加藤弘之君○國の基のはぎみと文學博士小中村清矩君●論說○國の基の目的○國の基の發刊に就て理學博士矢田部良吉君○吾人取る所の女子教育の方針バチロルオフサイエンス能勢榮君○病氣養生の話醫學博士三宅秀君○動物の保護同化理學士ドクトル飯島魁君○Wo manifestutti.I.G.P.君●小說○娘の行末に付き夫婦の問答礫臺山人○園の梅(第一枝)櫻塘山人●文藝○梅花盛久文學博士黒川眞頼君○柳の落葉の序東京高等女學校教諭中村秀香君○氷の話同校第四年生宮崎ゑい君○グラフオンの話同校第二年生津田りき君○椎茸の話同校第三年生入澤みゆき君●雜纂○雜報○雜話○批評十餘件●挿畫雪中少女を慰むる圖○宗母少女を責むる圖……耕靄女史

國のとも發起總代人

東京大學教授兼教頭東京高等女學校長東京訓盲唖學校長理學士矢田部良吉君○東京高等女學校教諭教頭幹事バチロルオフサイエンス能勢榮君○文科大學教授第一高等中學校教諭東京女學校教諭バチロルオフアーツ神田乃武君○東京高等女學校教諭瓜生繁子君○全武村千佐子君●

發行所　東京馬喰町一丁目一番地　**興文社**

●新小說

毎月二回刊行　壹卷定價拾錢

●新小說發行以來大に江湖の愛看を得て毎卷再三版を要するに至れり依て尙は其精美優粹を加へん爲め同好會員の贊成を得

森田思軒饗庭篁村須藤南翠

の三君に請ひ本誌編輯主任の承諾を得たり爾來誌上に如何なる光彩を添ふるかは敢て贊する處に非らず●新小說從來單に小說をのみ掲げ來りしが今より隨時小說に關する說話評論隨筆を掲て讀者に益するとあるべし●新小說第五卷々時々附錄を發し短篇若は長篇の小說を掲げん既に第五卷には會員石橋忍月君の優美なる短編の小說を附錄せり

東京日本橋通四丁目五番地　**新小說發行所同好會**

●寄宿通學男女生徒募集

今般從前學科ノ外幼年科ヲ設ケ午前ハ英漢數普通學午後ハ三時半ヨリ英學漢學ヲ教授ス付テハ尋常小學卒業者男女ヲ問ハズ寄宿通學ヲ許ス且又内規ヲ設ケ三ケ年以上ノ學費ヲ前納スル者ハ一割ヲ減ス此旨父兄証人ニ廣告ス

神田區小川町壹番地　私立　**進德館**

出張教授を望む

品行方正高等の教育を受けたるもの餘暇を以て毎日官員華族若くは其他の令息令孃君へ出張教授仕度候間御望の方は弊社まで御通知被下度候尤時間は午後の中一時間乃至二時間とす又二人以上組御合にて一同へ教授仕候もよろしく候

●●神田區平永町九番地に轉居仕候

山田美妙齋　敬白

いらつめ

發兌	毎月十五日に發兌すへし		
定價	一冊八錢	半年(六冊)四十五錢	一ヶ年(十二册)八十錢
郵税	一錢	六錢	十二錢
合計	九錢	五十一錢	九十二錢
郵便爲替	郵便爲替は拂渡局名欄内に(神田郵便局)と記し受取人欄内に(神田駿河臺南甲賀町八番地成美社)と御認め被下へく候又郵券代用ハ郵便爲替の無き地に限り一割増なれハ妨なし但し一錢切手に限る		
見本	見本一册御入用の方は一錢郵券九枚にて發送可仕候		

發行兼編輯人　山田武太郎　印刷人　佐野忠吉

發行所　東京神田區駿河臺南甲賀町八番地　**成美社**

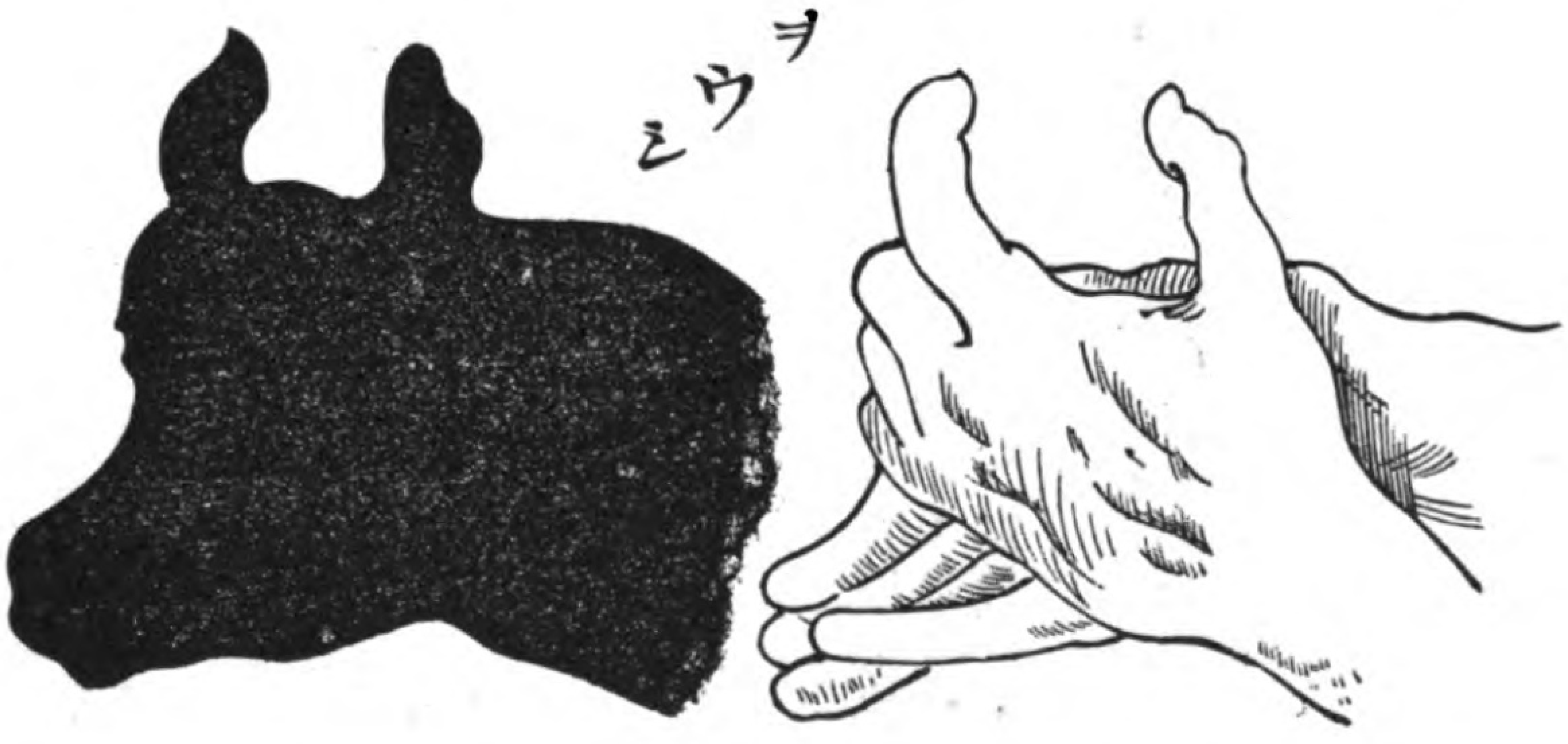
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

(遞信省認可)

次号附録ハ織田信長

木下藤吉郎の

妻に與へた



手紙の眞蹟

(東京並木活版所印行)

明治廿二年四月十五日發兌